

平成14年度

掛之上遺跡13・16・17

— 本文編 —

2003

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所建設経済部区画整理課

平成14年度

掛之上遺跡13・16・17

－ 本文編 －

2003

静岡県袋井市教育委員会
袋井市役所建設経済部区画整理課

例 言

1. 本書は、平成14年度に袋井市教育委員会と袋井市役所建設経済部区画整理課が実施した、^{かけのうえ}掘之上遺跡の第13・16・17次（市単独予算対応分）の発掘調査報告書本文編である。
2. 本発掘調査は袋井市教育委員会松井一明を発掘調査の担当者として実施した。
3. 本調査に係る事務については、袋井市役所建設経済部区画整理課駅前推進係が行った。特に、駅前推進係の白井正彦、松井一己、松井純二、藤田佳三、渡邊規恵の各氏には、現場と事務に関して円滑な調整をして頂いた。ここに記して感謝いたします。
4. 本書の編集・執筆は松井が行った。
5. 本書に使用した遺物の写真は、松井が撮影したものを使用した。
6. 本書に使用した遺構の実測図は、株式会社フジヤマが行った写測図を使用したものであるが、土層断面図や遺物出土詳細図等については松井が作成した。なお方位・測量図については、国土座標真北（日本測地系）を使用している。
7. 本調査で得た資料については、すべて袋井市教育委員会が保管している。
8. 本発掘調査は静岡県教育委員会教育長より袋井市長あて「埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」（教文第2-51号・平成11年6月8日付け）の指示によるものである。
9. 本書作成のために資料の提供やご協力を賜った機関・方々については報告書7に掲載する。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	3
第3章 掛之上遺跡と古墳時代の周辺遺跡の様相	4
第4章 第13次発掘調査	5
1. 遺構	5
土層	5
竪穴住居	5
掘立柱建物	5
土坑	5
溝	6
柱穴群・その他の遺構	6
2. 遺物	7
弥生時代の遺物	7
古墳～平安時代の遺物	8
鎌倉時代以降の遺物	8
第5章 第16次発掘調査	21
1. 遺構	21
土層	21
竪穴住居	21
掘立柱建物	21
方形周溝墓	22
土坑・井戸	23
溝	23
柱穴群	23
2. 遺物	24
弥生時代～古墳時代初頭の遺物	24
古墳～奈良時代の遺物	27
平安時代以降の遺物	27
第6章 第17次発掘調査	48
1. 遺構	48
土層	48
竪穴住居	48
掘立柱建物	48
方形周溝墓	48
土坑	48
溝	49
柱穴群	49

2. 遺物	49
弥生時代の遺物	49
古墳時代以降の遺物	49
第7章 まとめ	55
1. 第13次発掘調査区の様相	55
2. 第16次発掘調査区の様相	56
3. 第17次発掘調査区の様相	57

挿 図 目 次

第1図	調査位置図	2
第2図	第13次発掘調査区全体図	9
第3図	基本土層 SB1~4実測図	10
第4図	SH1~3 SK1・2 SX1実測図	11
第5図	SK3・5・7・12実測図	12
第6図	SK8・SD1土層実測図	13
第7図	土器実測図1	14
第8図	土器実測図2	15
第9図	土器実測図3	16
第10図	土器実測図4	17
第11図	土器実測図5	18
第12図	土器実測図6	19
第13図	土器実測図7 金属製品・石製品実測図	20
第14図	第16次発掘調査区全体図	25・26
第15図	基本土層 SB8・SH12実測図	28
第16図	SB7-A・B実測図	29
第17図	SZ3・SD12実測図	30
第18図	SH5実測図	31・32
第19図	SZ3土器出土状況・溝内土坑1 SD12土器出土状況 SE1実測図	33
第20図	SZ4実測図	34
第21図	SZ13実測図	35
第22図	SZ14実測図	36
第23図	SK1・4・14・15実測図	37
第24図	SK16実測図	38
第25図	土器実測図1	39
第26図	土器実測図2	40
第27図	土器実測図3	41
第28図	土器実測図4	42
第29図	土器実測図5	43
第30図	土器実測図6	44
第31図	土器実測図7	45
第32図	土器実測図8	46
第33図	土器実測図9 石製品実測図1	47
第34図	第17次発掘調査区全体図	50
第35図	基本土層 SB2 SH2実測図	51
第36図	SZ1実測図	52
第37図	SZ1土器1 SK17・18実測図	53

第38図	土器実測図	54
第39図	第2次発掘調査区S Z 1西溝出土土器実測図	54
付図1	掛之上遺跡時代別遺構分布図(弥生)	
付図2	掛之上遺跡時代別遺構分布図(古墳)	
付図3	掛之上遺跡時代別遺構分布図(奈良)	
付図4	掛之上遺跡時代別遺構分布図(中・近世)	
付図5	掛之上遺跡全時代遺構分布図	

写真図版目次

図版1	遺物写真(1)	第13次発掘調査区出土土器
図版2	遺物写真(2)	第13次発掘調査区出土土器、土・石製品 第16次発掘調査区出土土器
図版3	遺物写真(3)	第16次発掘調査区出土土器
図版4	遺物写真(4)	第16次発掘調査区出土土器
図版5	遺物写真(5)	第16次発掘調査区出土土器
図版6	遺物写真(6)	第16次発掘調査区出土土器、石製品 第17次発掘調査区出土土器

掛之上遺跡第13・16・17次発掘調査報告書

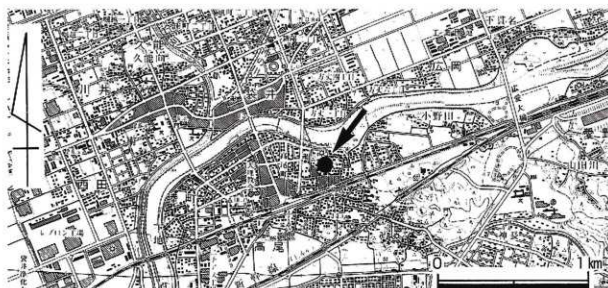
第1章 調査に至る経過

袋井市高尾地内に所在する掛之上遺跡は、昭和49年7月～12月に「中遠広域都市計画事業袋井駅前地区土地区画整理事業並びに中遠広域都市計画道路の建設」に関連して、掛之上地区に所在していた周知の埋蔵文化財である孤塚古墳が発掘調査の対象となり、孤塚古墳発掘調査委員会が組織され、川井正一氏（当時袋井市教育委員会）を担当者として調査を実施したのが第1次発掘調査である。第1次発掘調査の後、昭和57年に個人住宅建築（第2次発掘調査）、昭和63年に袋井駅前地区土地区画整理事業に伴う道路部分（第3次発掘調査）、平成9年に（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所により原野谷川護岸改修工事（第4次発掘調査）が実施された。

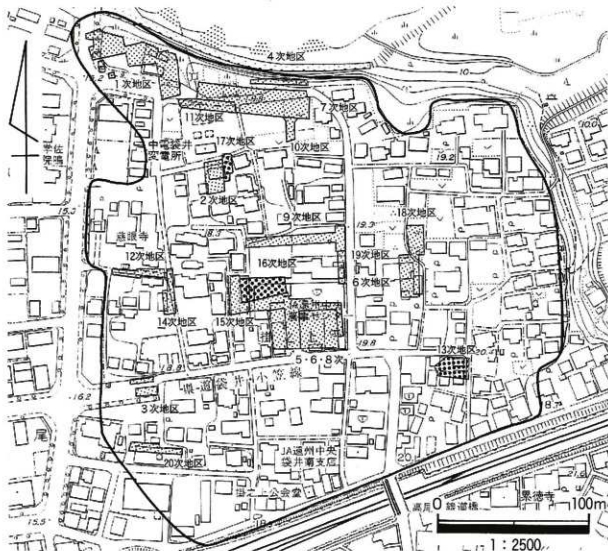
今回報告の掛之上遺跡第13・16・17次発掘調査は「袋井市駅前第二地区土地区画整理事業」に伴う発掘調査である。関連の発掘調査はまず平成9年に永井義博氏（袋井市教育委員会）を担当者として試掘調査が実施され、概ね掛之上地内のほとんどに埋蔵文化財が存在することが判明した。この試掘調査の結果から本調査に取り掛かるため、平成11年5月6日付で袋井市長豊田舜次名（袋井市役所区画整理課長）で文化庁長官宛てに「埋蔵文化財発掘の通知について」（文化財保護法57条の3の規定）が提出された。これを受けて平成11年6月8日付の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（教文第2-51号）の通知が、静岡県教育委員会教育長杉田豊名で袋井市長宛て送付され、区画整理事業着手前の発掘調査が正式に指示された。

「袋井市駅前第二地区土地区画整理事業」の発掘調査については、主に都市計画・区画道路と宅地造成部分が調査の対象となっている。宅地造成部分については今回報告のように市対応の発掘調査となるほか、道路部分については歩道がつく客員幅17mの幹線道路（交付金対応）と、歩道部分のない客員幅6mの区画道路（補助金対応）に別れる。本調査の行われた経過は、第1回目として平成11年度に永井義博氏を担当者として遠州中央農業協同組合袋井南支所（J A南支所）の移転に伴う建物建設予定地分（第5次発掘調査）を始めとし、平成12年度以降は松井が担当者として、南支所の建物設計内容の変更や周辺地下工事に係わる追加の発掘調査（第6次発掘調査）、小野田柳原線に伴う発掘調査（第7次発掘調査）の2件の発掘調査が実施された。引き続き平成13年度では補助金対応の区画道路建設に伴う発掘調査として区画道路6号線（第9次発掘調査）、区画道路1号線建設（第10次発掘調査）に係わるもの、市単独予算対応のJ A南支所の駐車場部分の造成に係わる第8次発掘調査、交付金対応の幹線道路部分の小野田柳原線に伴う発掘調査（第11次発掘調査）、市単独予算対応の特殊道路1号線（第12次発掘調査）など第8～12次の合計5件の発掘調査が実施された。

平成14年度では、今回報告する市単独予算対応分の宅地造成成分の調査である第13・16・17次発掘調査のほかに、補助金対応の区画道路建設に伴う発掘調査では区画道路4号線（第14次発掘調査）、区画道路5号線建設（第15次発掘調査）、区画道路2号線（第19次発掘調査）、区画道路10号線（第20次発掘調査）、交付金対応の幹線道路建設に伴う発掘調査の出端掛之上線（第18次発掘調査）の合計8件の調査が実施され、年々増加の傾向が見られる。また、個人住宅の基礎部分や幅の狭い側溝など小規模な埋蔵文化財の破壊に伴う事業については立会調査を実施しており、平成14年度だけでも7件を行っているが、これについてもかなりの件数になってきている。



1 : 25000



1 : 2500

第1図 調査位置図

第2章 調査の経過

平成14年度の発掘調査については、昨年度より強く要望のあった村岡利夫邸の宅地造成地に係る発掘調査を最優先で行うよう依頼を受けていたために、平成14年度の当初の調査（第13次発掘調査）として予定していた。通常宅地の場合、規制の範囲内でできるだけ盛土をしてもらい建物の基礎工事で遺物包含層を掘削しないような工法を採用するように施工業者に依頼しているが、やむをえず基礎部分のみの小面積が包含層を掘削する場合は、学芸員の立ち会い調査をした後着工してもらうよう協力を要請している。しかしながら、基礎工事が遺物包含層や遺構検出面に対して広範囲に及ぶ場合については、発掘調査を行うよう指導しているため、今回のように建物の基礎工事の掘削範囲が広い面積で遺物包含層や遺構検出面に及ぶことが判明した場合、本調査を実施することになる。平成14年度でも桑原宏雄・内田昌子・寺井立子・村岡治敏邸の4件については立会調査を実施した後に建物建設を行うよう指導したが、今回報告の村岡利夫邸や鈴木光子・青木三男邸（第16発掘調査）、竹内郁夫邸（第17発掘調査）については、本調査を実施することとなった。

さて第13次発掘調査は建物建設範囲がほぼ宅地の全域に及ぶことが判明したため、宅地全体を調査対象とし調査対象面積は260㎡となった。発掘調査は平成14年5月20日より重機による表土掘削を開始した。包含層は部分的に10～20cm存在することが判明したため、重機の表土掘削は表上に留め、遺構確認面までの掘削は行わなかった。包含層の人力による掘削、何回か雨天のため、遺構の密集度が高いことから予定よりも作業が遅れ気味になったこともあったが、東半分については包含層もなく遺構も少なかったため、なんとか予定通り6月下旬には終了することができた。

第16次発掘調査は遺構面の破壊を伴う造成範囲がほぼ宅地の全域に及ぶことが判明したため、宅地全体を調査の対象とし調査対象面積は450㎡となった。発掘調査は8月1日より重機による表土掘削を開始した。包含層が部分的に10cm存在する部分もあったが、包含層の遺存状況は悪く遺構確認面まで掘削することができた。排土箇所がなかったため、東半分の調査を先行した。天候も良く遺構の密集度もさほどではなかったが、遺構内の土器の出土量は多かった。東半分の調査区は8月中旬に終了した。西半分の調査区は9月1日より重機による表土の除去を行い、こちらの調査区も包含層の遺存状況が悪く遺構確認面まで掘削することができた。西半分の調査区については遺構の数は比較的多かったが、遺物の出土量は少なく天候にも恵まれ順調に進み、9月下旬には調査が終了した。なお、第6次発掘調査で見つかった郡衙正倉域に存在していたと考えられる双倉の遺構の一部が検出されているため、この遺構については静岡県教育委員会文化課の指導もあり、遺構部分のみ遺構面の造成を避けしてもらい、遺構には砂を充填し、学芸員立ち会いのものと埋めもどし保存を計った。

第17次発掘調査は造成面のほぼ宅地全域に及ぶことが判明したため、宅地全体を調査の対象範囲としたが、調査対象面積は100㎡程度に留まること、建設計画に合わせると8月内に調査が終了する必要に迫られたため、第16次発掘調査と並行して行うこととなった。発掘調査は8月19日より重機による表土掘削を開始した。包含層は一部を除いてほとんど存在しなかったため、重機では遺構確認面まで表土掘削をすることができた。遺構の密集度は低く、遺物の出土量も少なかったため、予定通り8月下旬には調査を終了することができた。

10月以降は田端掛之上線道路の調査を開始したため、市単独事業分の報告書刊行に向けての資料整理は現地調査と並行して行い、関係者の協力を得てなんとか年度末の平成15年3月末日までに報告書を刊行し、全ての事業を終了した。

第3章 掛之上遺跡と古墳時代の周辺遺跡の様相

掛之上遺跡は現在までの調査状況から、縄紋～中・近世に至る歴代の遺跡で、とくに弥生時代中期～奈良時代については袋井市屈指の拠点集落・官衙遺跡であることが判明してきている。今回は古墳時代後期の遺構が特筆されるため、周辺の古墳時代後期の遺跡について概観してみたい。

袋井市域の古墳時代後期の遺跡としては、まず坂尻遺跡が特筆される。坂尻遺跡は、袋井市東部地区の掛川市との市境で、近世東海道が原野谷川を渡る西岸の自然堤防上という極めて交通の便に恵まれた立地条件を満たす場所に位置している。遺跡からは袋井バイパスや大和ハウス工業工場建設地区等多くの調査区から、溝に囲まれた大型の掘立柱建物群や竪穴住居・掘立柱建物が多数見つかった。とくに大和ハウス調査区から、6世紀後半の溝に囲まれた大型掘立柱建物や倉庫の存在する首長居館部、溝に囲まれているが掘立柱建物と竪穴住居からなるやや上位階層の居宅の他に、溝に囲まれていない竪穴住居主体の地域が、溝に囲まれた大型掘立柱建物群が主体の中心域を取り囲んでいることが判明した。坂尻遺跡の集落構造の内容から見ると、古墳時代後期にも明確な階層差が存在することが明らかとなっている。なお、坂尻遺跡は奈良時代になると佐野郡衙と日根駅家が設置されている。

掛之上遺跡でも第1・7次発掘調査区から6世紀前半の柵列に囲まれた掘立柱建物のみからなる首長居館らしい遺構が発見されている。6世紀後半になると竪穴住居群が多数存在する所に変化し、首長居館は一世代程度の極めて短期間には廃絶することが判明している。掛之上遺跡においてはまだ6世紀後半の首長居館部の位置は分らないが、おそらく坂尻遺跡と同様に一～二世代の時期幅をもつ首長居館が遺跡内で移動し、周辺部には竪穴住居を主体とする建物群や、掘立柱建物が主体となるやや上位階層の住人の建物群に取り囲まれている集落構造になっていることが想定される。また、掛之上遺跡も付近に近世袋井宿が開設されたことから見て分かるとおり、古墳時代後期の幹線道が存在していたと考えられ、坂尻遺跡と同様に交通路から見た物流拠点に所在していたと理解される。さらに、奈良時代になると坂尻遺跡と同様に、郡衙遺跡として変貌を遂げることからも見て、律令時代に整備される古代東海道の前身となる幹線道が付近に存在していたことを証明するものであろう。

群集墳から見ると、掛之上遺跡の周辺には、総数30基程度からなる地蔵ヶ谷横穴群、20基程度の金山横穴群、30基程度の愛野向山横穴群のほか、100基近くなるであろう大後期群集墳の長者平古墳群が存在している。横穴墓と横穴式石室の群集墳が混在している地域ではあるが、統べて合わせると200基以上の大後期群集墳・横穴群地域となっていることが判明してきている。全ての後期群集墳・横穴墓群が掛之上遺跡の墓地となるかどうかは分らないが、そのどれかが掛之上遺跡の住民のための相応しい墓地であることは疑い余地がない。また、6世紀前半では大門大塚古墳や御所森古墳、6世紀前半～後半では団子塚古墳群で首長墓が築造され続け、地蔵ヶ谷横穴群では冠帽をもつ横穴墓が発見されるなど、集落構造と付近の墳墓の両面から首長層や上位階層の住民の存在が解明されている。

坂尻遺跡でも総数100基以上になる菅ヶ谷横穴群が存在し、権現山古墳、宇佐八幡神社境内1号墳など5世紀末～6世紀代と目される前方後円墳も分布している。古墳時代後期の集落構造は明らかではないが、郡衙遺跡と目される春岡遺跡でも総数100基以上になる宇刈・春岡横穴群が付近に存在しており、さらに春岡2号墳といった6世紀後葉の首長墓も見つかってきており、掛之上遺跡と極めて類似する状況が見て取れる。これらの古墳群内でみられる階層性と、掛之上遺跡を始めとする古墳時代後期の集落内で見られた建物群の階層性の比較検討ができる可能性は高いと思われる。今後の調査の進展が期待される。

第4章 第13次発掘調査

1. 遺構

土層 今回の調査区では住宅地であったため建物の解体に伴い包含層の保存状況は悪かったが、遺構面まで到達する攪乱は少なかった。しかしながら用地の西半分では包含層が残存し、厚いところで20cm、薄いところでは10cm程度、平均10cmの弥生～古墳時代後期の包含層が20～30cmの表土の下に存在した。なお、ごく一部に存在したと思われる中世～近世の遺物を包含する1'層も調査区東端で見られた。さて、遺構の地山面である黄褐色土上面のレベルは、調査区内ではほぼ水平となるが、東端部分になると少し低くなる。そして、調査区外では大きく傾斜し低くなり高低差で30cm以上となる。

堅穴住居(SB) 堅穴住居はSB1～4の4棟が検出されたが、全て弥生時代後期に該当するものである。検出された場所は調査区西側に集中し、調査区が狭いせいか全体の形状の分かったものはない。また、全ての堅穴住居は、床面が包含層と地山面の境に営まれ、あまり地山面を深く掘り込まない状況から、本調査区西半分に検出された多数の柱穴群の中に弥生時代～古墳時代後期の堅穴住居の柱穴が含まれている可能性は充分考えられる。

弥生時代後期の当地域の一般的な堅穴住居は、隅丸方形や楕円形プランで4本柱、壁に添って細い壁溝をもち中央よりやや南側に偏った地床炉をもつタイプである。一辺5～8mが普通サイズでSB1～4が該当すると思われるが、炉の位置はSB1以外は調査区域外や攪乱により失われたため、全体の構造はよく分からない。SB1の炉は地床炉で配石等はない。壁溝は全ての住居から見つかっている。柱も2箇所確認できた以外は、掘立柱建物や土坑との切り合いでよく分からない。該当期期については、何れも床までの埋土が浅いこと、混入品も見られること、出土遺物量が少ないことから明確には特定できない。しかし、数少ない出土土器から検討すると、SB1の下層の土器は白岩式新段階の土器が出土しているので弥生時代中～後期の時期になると考えたい。

掘立柱建物(SH) 掘立柱建物はあまり大きな廻方を持たない小型で円形の柱穴からなるSH1～3の3棟が検出された。とくに、比較的多く柱穴群が検出できた調査区西半分については、現地でかなり検討してみたものの、自信をもって小型柱穴からなる掘立柱建物として報告できる柱穴の組み合わせはSH1～3以外で提示しえなかった。しかしながら、たとえば古墳時代後期や鎌倉時代の遺物を出土する柱穴を抽出すると、SH1・2の周辺にまとまる傾向があることから、抽出できていない古墳時代後期や鎌倉時代の掘立柱建物は存在していたと推測される。

SH1～3は一部抽出できなかった柱穴もあるが、SH1のように桁行2間、梁行1間の小型の土間式建物、SH3は一部の検出であるがSH1と同様に桁行2間の小型の土間式建物になると推定される。柱穴から出土した土器から該当期を考えると、SH1・2が鎌倉時代になる可能性が高く、時期決定の土器が出土していないSH3も鎌倉時代に該当する可能性がある。

土坑(SK) 土坑は弥生時代の遺物を出土するものと、鎌倉時代の遺物を出土するものに大きく分けられる。弥生時代の主要土坑はSK1・3・7・8である。検出された位置から見ると、弥生時代の堅穴住居と重複するSK3とそれ以外のものに分けられそうであるが、いずれも弥生時代の居住域内の土坑と考えられる。後期前葉新段階の土器がまわって出土した土坑はSK8である。SK8は、直径2.5mを測る立ち上がりの比較急な円形の土坑である。土器は破片が埋土内の上層や下層から一様に出土したが、大型の破片や礫は底近くからの出土が多かった。規模は小さくなるがSK3についても後期後葉の土器を出土する直径1.8mを測る立ち上がりが急な円形土坑で、単なる土器の廃棄土坑

とは考えられない。形態から見ると、貯蔵穴などの用途が考えられるのではなかろうか。SK1・7については出土遺物が少ないため詳細な時期はなんともいえないが、少量の土器片から見ると弥生時代後期に該当し、不定形な形態であることから塵芥の廃棄土坑であると考えたい。

鎌倉時代の遺物を出土した土坑はSK2である。SK2は北側の底近くに13世紀前葉に該当する完形品の知多産山茶碗1点を副葬する中世墓と考えられるものである。SK5についても長軸1.5mを測る方形土坑で、遺物の出土はなかったがSB1よりも新しい遺構であることから、中世墓になる可能性を考えておきたい。なお、SK5付近の包含層から鉄刀や山茶碗の破片、柱穴内より刀の鐔状の鉄製品が出土しており、遺構確認面まで掘り込まれていない中世墓の存在が指摘される。また、試掘調査の際に付近の試掘坑から和鏡とかわらけが土坑内より一括して出土しており、これも中世墓に該当する土坑と考えられる。

溝(SD) 溝状遺構は鎌倉～戦国時代に該当するSD1、江戸時代末期～明治時代の区画溝であるSD2～4などが検出された。

SD1については断面箱形の深さ30cm程度の浅い溝で、幅も広いところで2m程度となり、中世の屋敷地の濠と呼ぶにはやや規模が小さく、区画溝程度の用途と考えられる。埋土から見ると江戸時代の溝とも考えられたが、出土遺物は鎌倉時代の山茶碗が主体で戦国時代の陶器が少量出土し、江戸時代の陶磁器は出土していない。

SD2～4については幅0.5～0.3mを測る細い溝で、何れも南北方向に掘られている。遺物の出土量は少なく、SD3から江戸時代末期の陶磁器が出土している。いずれも、遺物の出土量の少なさから見て、江戸時代末期～明治時代の畑地の排水を兼ねた区画溝になると考えられる。

柱穴群(SP)・その他の遺構(SX) 柱穴群に関しては掘立柱建物や竪穴住居の柱穴も含めて総数約200基の柱穴が検出できた。分布は一見すると調査区西半分に集中的に検出されているようにも見えるが、東半分には中・近世の溝があるため少ない印象を受ける。東半分の遺構面残存部分の柱穴の在り方は激減はしないが、減少傾向にはあると考えられる。面積あたりの数でみると、かなり多い地点となり、弥生時代中～後期、古墳時代後期、鎌倉・戦国時代の集落・墓地部分にあたる地点と理解される。またSP132～134のように、弥生時代中期中葉の遺物を出土する径1～0.6mの比較的大きな穴については、貯蔵穴や塵芥穴等の用途の土坑と考えてもよいものも見られる。

さて、古墳時代後期を主体と考えられる土師器や須恵器を出土するものは、本調査区では総数約20基となく、全体の数から見ると10%の比率となり、他の調査区が平均30%以上を測ることから、やや少ない傾向にはなり、竪穴住居等の明確な古墳時代後期の遺構が確認されず、弥生時代の遺構の比率の高い調査区となっていることが分かった。

本調査区ではとくに中世の遺物が確認できる柱穴が13基存在し、今までの調査区では区画溝程度しか確認できなかった中世の建物跡が検出できた意義は大きい。さらに、SD1の比較的大規模のしっかりした区画溝についても、鎌倉～戦国時代の遺物が一定量出土することから中世の居住域の模様の一旦を確認することができた。時期についても13世紀代の山茶碗を出土するものと、15世紀後葉の古瀬戸後期新段階の時期のものに分かれる傾向が見られた。13世紀代の柱穴や掘立柱建物については、中世墓との時期差はなく、屋敷地内に墓地を設定する屋敷墓の可能性もでてきている。

SX1については、長さ8m、幅2mの細長く浅い大型の土坑状遺構である。竹の芯材の痕跡の見られる土壁材のような土製品が出土しており、明確な用途は不明ながら中世屋敷地の中に掘られた水溜池のようなものであろうか。

2. 遺物

本調査区の遺物は、弥生時代中・後期、古墳時代後期、奈良時代、鎌倉時代、戦国時代、江戸時代末期の遺物が出土しているが、弥生時代後期、鎌倉時代の遺物が主体である。

弥生時代の遺物

土器 弥生時代については中期と後期の土器が出土している。個々の資料について説明する紙面もないので、一括性の高い土器についてのみ説明を加えていきたい。

中期中葉の土器は一括資料に該当するものはないが、S P 133・134から断片的な資料が出土している。壺については45の受口、43は肩部に隆線文をもち刻目を入れ条痕仕上げのなる広口壺と、46の竹管状工具による押引文の施された細頸壺が破片で出土しており、何れも嶺田式に該当する壺である。46の細頸壺に施された赤彩は、11と同様にこのタイプ壺にはよく見られる特徴である。甕は条痕仕上げで、口縁端部の内・外面に刻目を入れる47・48・50と、刻目のない44がある。

中期後葉の土器はS P 132から出土している。壺については39の横の櫛描文に対して、所々縦方向に櫛描文のあるもの、甕は41の口縁端部に刻目のない刷毛目仕上のものと、42の台付壺の脚が出土しており、文様や形態から見ると白岩式新段階に該当するものであろう。ただし、40は嶺田式の条痕仕上げの口縁端部に刻目をいれる甕である。他に9・36の長胴で刷毛目仕上の台付甕も見られる。

後期の土器は前半を2時期（古＝鶴松9次004、新＝鶴松3次S D 1）、後半を3時期（古＝堀越ジョウヤマS D 1、中＝土橋S K 77、新＝一色前田4号住）にわけて一括資料の検討をしてみたい。しかし、本調査地区では一括資料とはいえないまでも、ある程度指標となりそうなものは前半新段階のS K 8だけである。高坏は単純口縁の78～80と、小さな折返口縁になる76・77の2種類の口縁部形態がある。脚と坏部の接合部の文様は82・89のような横の一条の隆線文が典型的で、87のような複数の隆線文と83・84・86の櫛状工具による複数条の横の刺突文は新しい要素で、88の一条の隆線文に斜行の刺突文を入れるものは珍しい。脚端部は短く急に立ち上がる90・91が典型的で、かなり短く内彎して立ち上がる92は白岩式新段階の鉢形高坏の脚に類似する。

壺は単純口縁の95・96、小さな折返口縁の94・97、頸部は100～103・105のような細頸で、106・108・109のように下部に稜線をもつ無花果形の胴部形態がこの段階の特徴を示すものである。文様は不規則な単斜行縄文や縦方向の羽状刷毛目調整、一段の横羽状刺突文が見られる。104については広口壺の頸部になると思われる。この段階の壺としては23のような袋状の受口口縁の壺も伴う。

甕は緩やかなくの字状口縁で胴部上半が直線的な136と137が白岩式新段階の台付壺からの特徴を残すものが主体であるが、138・139の球形胴の甕については新しい要素で、後期後半に繋がる形態であろう。基本的には口縁部には刻目を施すが、138・139のように刻目のないものは少ないが存在する。140のように大型のものも存在する。

後期後半の土器としては、24の肩部に複数の横刺突文の施された壺、22の深め坏部をもつ折返口縁の高坏は古段階、1の折返口縁の壺、7・26の2条の羽状刺突文壺、4の羽状刺突文の高坏は中～新段階に該当するものと考えられる。

石器 弥生時代の石器のうち大陸系磨製石器は11の扁平片刃石斧のみが出土した。11は比較的調整がなされた中型の扁平片刃石斧で、当地域では中期後葉～後期前葉の時期に多く見られる。10の刃部に刃痕や摩耗痕が認められる硬砂岩製の剥片石器は、中期～後期に良く見られる石器であるが、金属顕微鏡観察によると刃部に稲の取穂に関係した使用痕である光沢痕（ポリッシュ）は観察されなかったため、稲の刈取具等に関係した石器ではないことが証明されている。8の棒状の叩石と、9の球形の叩石についても弥生時代に良く見られる石器である。石材については緑色片岩は東三河～西遠江か

らの、硬砂岩は地元の川床礫であると考えられる。

古墳～平安時代の遺物

須恵器・土師器 古墳時代初頭の土器としては、52の内轆口縁と53の広口壺があげられる。52の壺については弥生時代後期後半新段階のものと類似するが、口縁の開き具合が大きく古墳時代に降るものと考えられる。53についても胴部下半に稜をもち弥生時代後期後半新段階の特徴を示すが、口縁部の形態は弥生時代にはあまり見られないものである。どちらも小山角田Ⅰ-1式(松井一明1995)に該当する資料と考えておきたい。

7世紀代の須恵器としては、坏身である10や、149の高杯の破片、159の甕の破片が中・近世の遺構内より出土している程度で、数は非常に少ない。

奈良時代の須恵器としては150の8世紀後葉の皿、185の壺の底部などが中・近世の遺構から出土しているにすぎず数も少ない。

平安時代の灰釉陶器として、33の清ヶ谷窯Ⅲ期(10世紀前葉 松井一明1989)、181の清ヶ谷窯Ⅳ-1期(10世紀末葉)に該当する2点が確認できた。

鎌倉時代以降の遺物

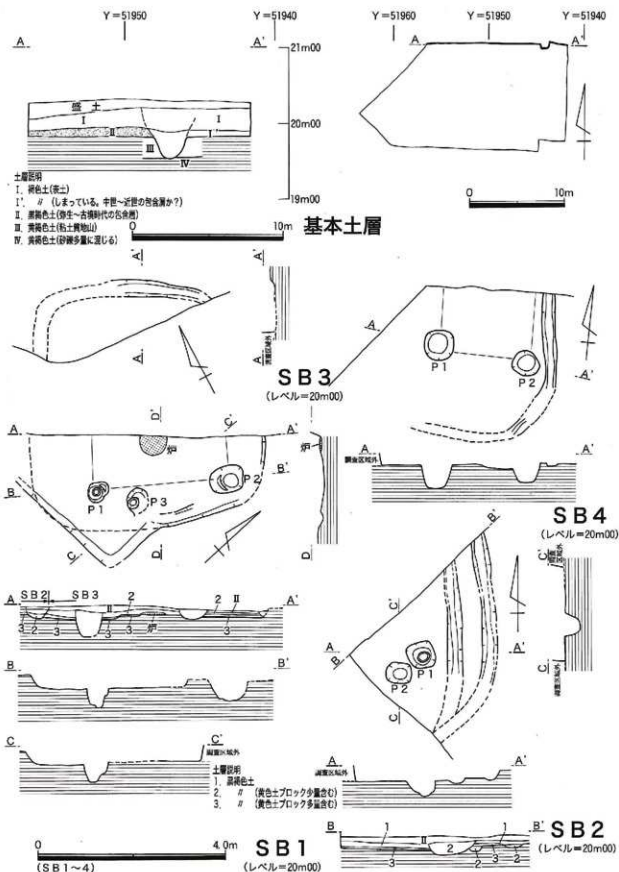
中世の土器については、瀬美・湖西産山茶碗である17・169・186の12世紀前葉(Ⅰ-1期、松井一明 1993)、19・153・154の12世紀後葉～末葉(Ⅰ-2期～Ⅱ期)、58・170・178の12世紀末葉(Ⅱ期)、18・155・156・172・174の13世紀前葉(Ⅲ-1期)、13・14の13世紀前葉～後葉(Ⅲ-1期～2期)、55・157・173の13世紀後葉(Ⅲ-2期)、166の13世紀末葉～14世紀前葉(Ⅲ-2期～3期)が出土している。常滑(知多産)の山茶碗は、15・57・65・151・152・167・168の13世紀前葉(5期、中野晴久 1994)、56の13世紀後葉(6期)が見られる。東遠江系山茶碗(金谷産)としては、162の12世紀前葉(Ⅰ-1期、松井一明 1993)、165・176は12世紀末葉(Ⅱ期)、16・34・59・60・64・163・171・175・177・187～189は13世紀前葉(Ⅲ-1期)のものとして確認された。

ほかに、184の古瀬戸瓶子の底部破片が出土している。底部が比較的厚く作られていることから見て、13世紀代の前期段階の製品とも考えられる。蔵骨器として利用されたものであろうか。さらに、179は見込に花文の施された青磁碗で13世紀後～14世紀代の製品、160の瓦も平安末から鎌倉時代初期に該当すると思われる薄手の製品である。遺跡内で中世の瓦葺の建物が存在するのであろうか。5・6の土製品についても竹状の芯材の痕跡が見て取れ、中世の土壁材の可能性が指摘できる。1・2の鉄製品は中世墓に伴う小刀の破片や鏝と考えておきたい。

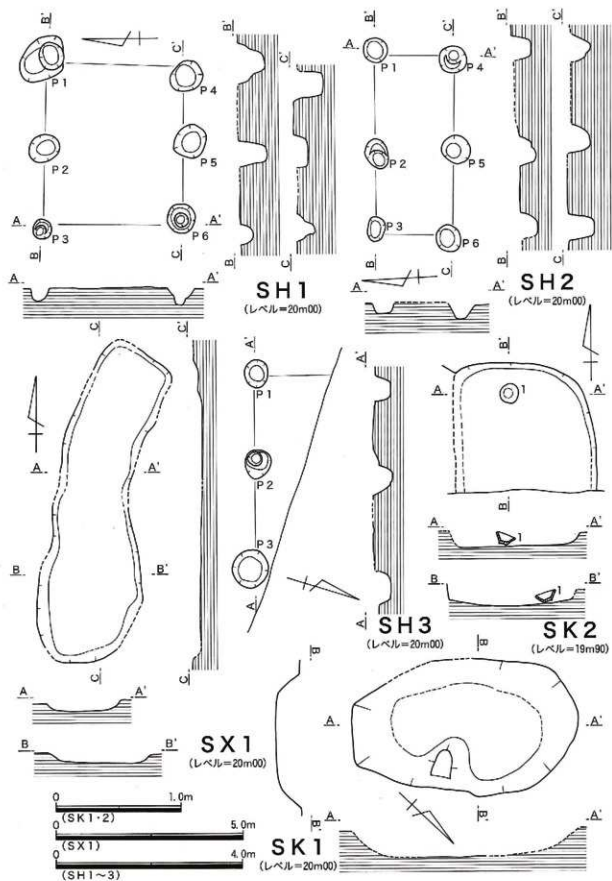
さて、本調査区では13世紀前葉の山茶碗が多く出土し、瀬美・湖西産山茶碗が5点、常滑産が7点、東遠江産が10点となり、東遠江産山茶碗が占める割合が圧倒的に多いが、他の調査区では瀬美・湖西産山茶碗が80%近くを占め東遠江産山茶碗は10%にも満たない比率であるのとは大きく異なる様相になった。調査区の性格上13世紀代の中で幕域と居住域が重なるため、幕域の様相であるとも断定は難しい。よって調査区が狭いため やや偏在した傾向になったと考えておきたい。

戦国期の土器については、15世紀後葉の古瀬戸後期Ⅳ新段階の37の緑釉小皿、35の錯鉢、182の大皿(藤沢良祐 1995)、16世紀後葉の瀬戸・美濃産の瀬戸大窯3期段階(藤沢良祐 1986)の158の天目茶碗が溝や小穴から出土しているだけで数は少ない。

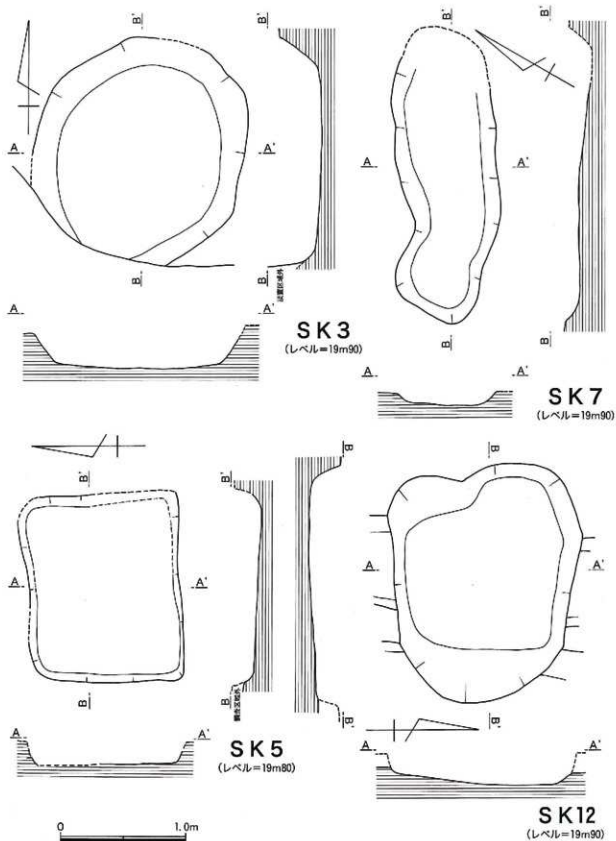
江戸時代末期～明治時代の遺物は溝から、肥前産の183の染付碗と、常滑産の大甕の破片である183、7の石製甕が出土しているにすぎない。



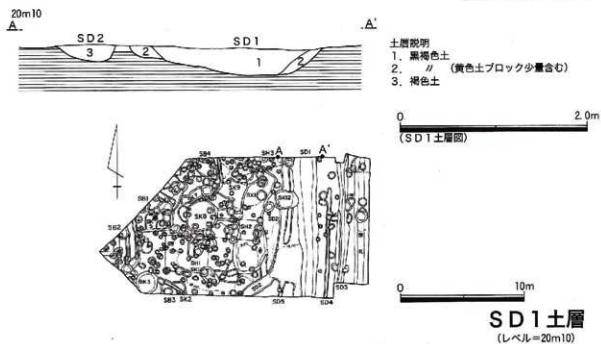
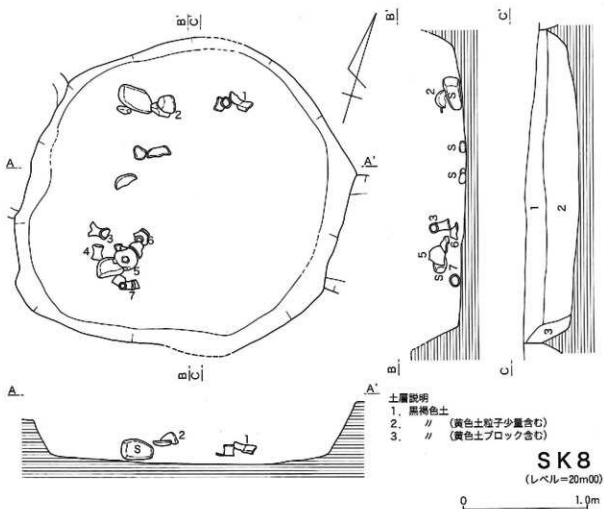
第3図 基本土層 SB1~4実測図



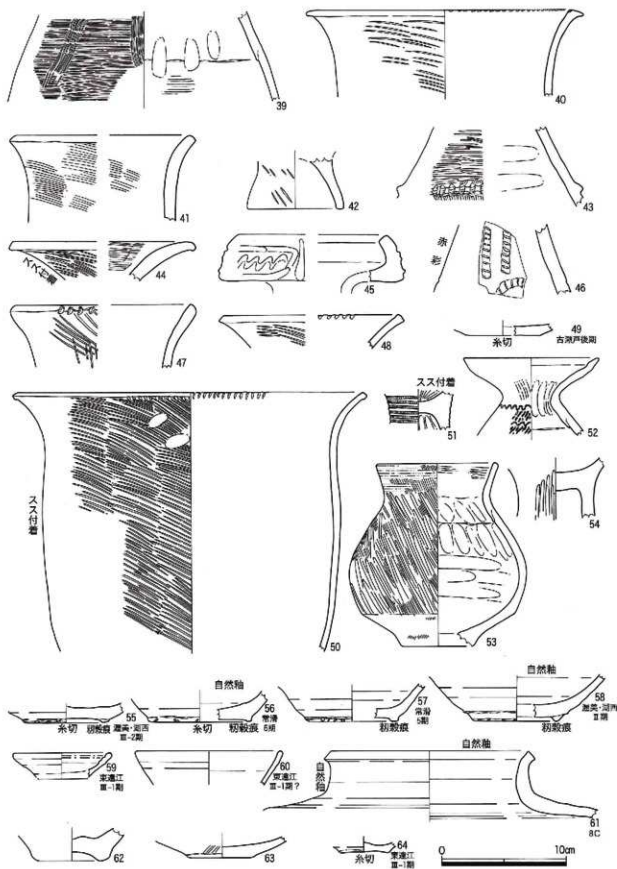
第4図 SH1~3 SK1・2 SX1実測図



第5図 SK3・5・7・12 実測図

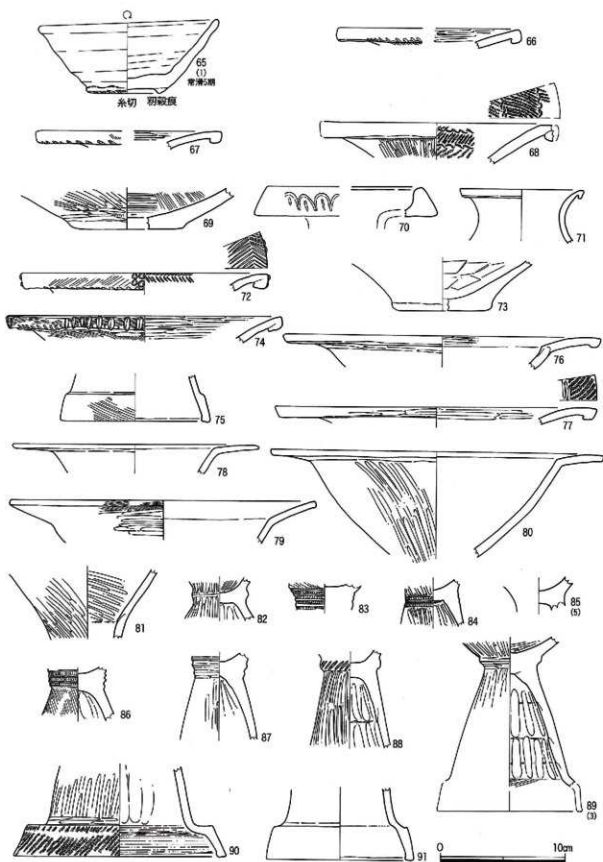


第6図 SK8・SD1土層実測図



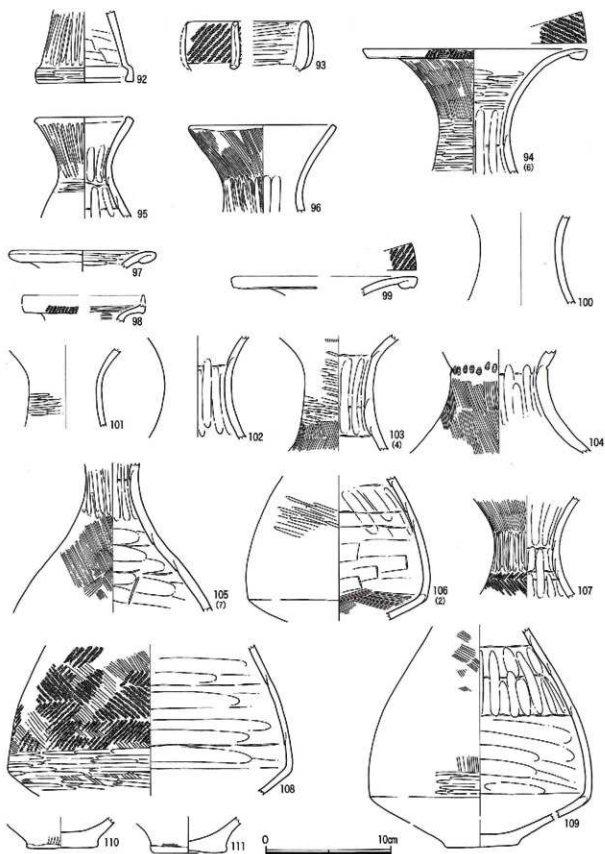
第8図 土器実測図2

39~42=P132 51~61=S X 1
43~48=P133 62~64=S K 1
50=P134

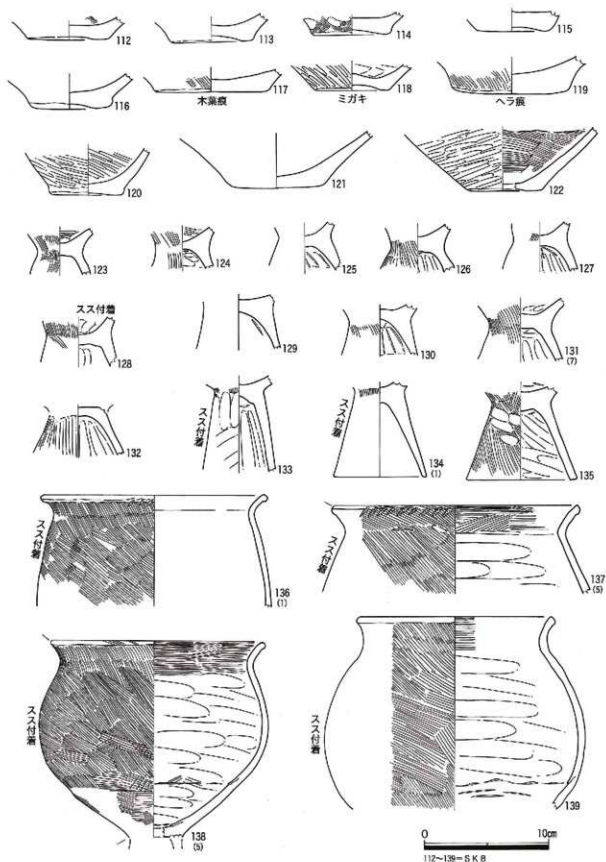


第9図 土器実測図3

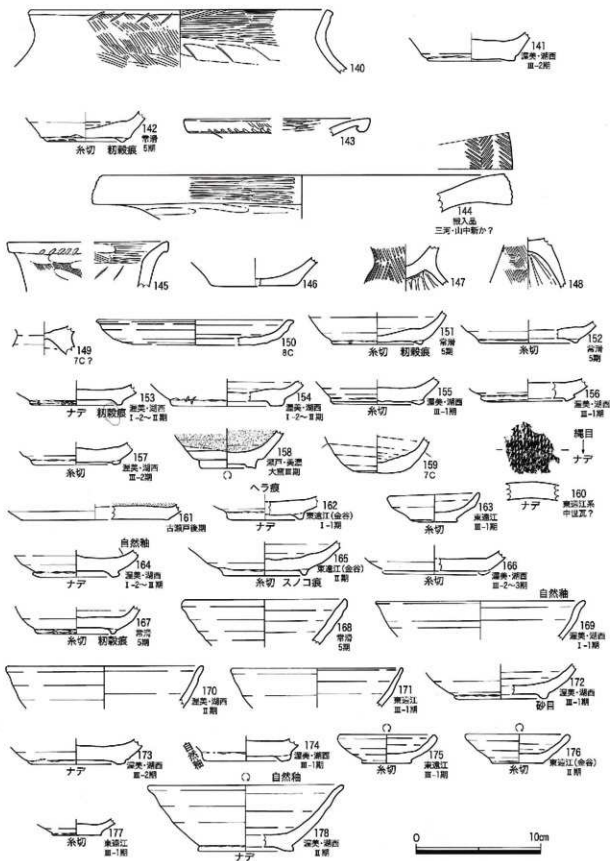
65=SK 2 74・75=SK 6
66~71=SK 3 77~91=SK 6
72・73=SK 4



第10図 土器実測図4



第11図 土器実測図5



第12図 土器実測図6

140~142=S K B 140~163=SD 1南平
143~148=S K B 144~176=SD 1南平下層
149~159=SD 1 177~178=SD 1北平下層

第5章 第16次発掘調査

1. 遺構

土層 今回の調査区では住宅地であったため建物の解体に伴い包含層の保存状況は悪かったが、遺構面まで到達する擾乱は少なかった。しかしながら用地の北端では畑地になっていたせいか包含層が残存し、厚いところで20cm、薄いところでは10cm程度、平均20cmの弥生～古墳時代後期の包含層が20cmの表土の下に存在した。さて、遺構の地山面である黄褐色土上面のレベルは、調査区内では東側で高く傾斜しており、高低差で最大50cm以上となろうか。

竪穴住居(SB) 竪穴住居はSB7・8の2棟が検出され、古墳時代前期と後期に該当するものである。検出された場所は調査区中央部分で検出された。全ての竪穴住居は、床面が包含層と地山面の境に営まれ、あまり地山面を深く掘り込まない状況から、本調査区全体に検出された多数の柱穴群の中に古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物の柱穴が含まれている可能性は充分考えられる。

SB8については、確実な時期を決定しうる遺物の出土はなかったが、無文の土器が多く出土していること、弥生時代や古墳時代中期に確実に該当する遺物はないこと、炉が地床炉であることから見て古墳時代前期の住居であると判断した。住居の形態は不明確ながら、隅丸方形で4本柱、西に偏った炉をもつことから入口は東側にもつ竪穴住居と考えられる。

SB7については、AとBの2棟の竪穴住居が重複し、BからAへの新旧関係が明らかである。何れもかまどをもち、出土遺物から見ても古墳時代後期に該当すると判断される竪穴住居である。今まで掛之上遺跡で検出できた古墳時代後期の一般的な竪穴住居は、方形や長方形プランで4本柱、壁に添って細い壁溝が掘られ、北側の壁にかまどとその脇に貯蔵穴を配置するものが知られており、SB7-A・Bは貯蔵穴の存在明確でない以外は一般的な住居と考えられる特徴を示している。大きさから見ると、一辺4～5mが普通サイズとなり、A住居は普通サイズ、B住居についてはやや大きなサイズに該当している。かまどの保存状況は良好で、位置は何れも北側の壁に見られ、A住居はほぼ中央に、B住居は東側に偏った位置に設置されている。B住居のかまどの位置が偏るのは、貯蔵穴の位置に関係する場合がほとんどであるが、床面の検出状況が良くなかったせいか貯蔵穴は検出できなかった。かまどの構造は構築材として明確な粘土を使用しないこと、焚口やかまどの内部が陥没した状況で検出されるため良く分からなかったが、A住居のかまどは煙出しの突出部が北側に見られる。該当時期に関してはB住居は過江須恵器編年Ⅱ～Ⅲ期前葉(MT15～TK10段階)、A住居はⅢ期後葉(TK209段階)に該当する須恵器が出土していることから、B住居が6世紀前～中葉、A住居が6世紀後葉に営まれていたと考えられる。

掘立柱建物(SH) 掘立柱建物は第6次調査で検出できた郡衙関連遺構の双倉であるSH5の北西隅のP28～P42までの4本部分の調査を行った。今回調査できた柱穴も何れも一辺1.3m前後を測る大きな方形の堀方をもち、底から直径50cm前後の柱の痕跡が確認された。P32・41では土層でも柱痕跡から見て底近くまでは柱は抜き取られていない状況で、P28・42では柱は抜き取られていた状況が確認できた。建物全体では、柱の痕跡が土層で確認できるものが多いため柱穴の底まで柱を抜き取ったものは少ないと見られる。今回の調査から見ても、3間×4間の大型の高床倉庫2棟を3間で連結した、桁行22.5m、梁行6mの超大型倉庫であることが確認できた。前回の調査では、柱内より1点だけ奈良時代後葉の須恵器を出土したものが存在したが、今回の調査ではP28より7～8世紀代に該当すると思われる須恵器の甕の破片が出土したにすぎなかった。おそらく、奈良時代の遺物の混じる柱穴は

ごく一部で、柱を抜き取る際に混入した可能性も考えられ、建物の建設時期は奈良時代でもごく初期の段階と考えられる。

SII12に関しては方形の掘方をもつ柱穴群のまとまりを考えてみたが、建物構造を確定できる柱並びにはなっていない。P1～3までが比較的良く並ぶため、P5とP4を除外して考えると、P1と2の間口が狭くなるため通常の建物ではなくて、正倉域を区画した塀などに敷設された1間×2間の6脚門のような遺構になる可能性も想定されるが、遺構の残存状況が悪く推定の域をでない。時期についても特定できるものは柱穴内より出土していないが、弥生時代の遺構よりも新しく主軸方向は正倉建物群と概ね類似しているので奈良時代と考えておきたい。

方形周溝墓(SZ) 方形周溝墓らしい溝の組み合わせは第6次調査区で検出された続きのSZ3・4の2基に加えて、新たに発見されたSZ12～14の3基の合計5基が検出された。前者は出土遺物から弥生時代後期、後者は弥生時代中期に該当するものである。

12～14号墓の平面形態は調査区域外になるものや新しい遺構と重複するために全体の形状が今一つ明らかにならないが、12・14号墓から推測すると四隅に陸橋をもつ形態になる可能性が高く、掛之上遺跡を始めとする東海・南関東中期方形周溝墓の一般的な形態を示すものである。推測にはなるが各溝の規模から見て、12・13号墓は一辺10m前後の規模になる中型の方形周溝墓、14号墓は一辺6m前後の規模になる小型の方形周溝墓の部類になる可能性が高いと思われる。よって本発掘調査区で検出された方形周溝墓は、14号墓のように小型のもの、12・13号墓のように中型規模のものなどがあり、中小の2つのクラスからなる周溝墓で構成されていることが判明した。いずれも全体の形状が判明しないため確定できないが、溝の配置から見るとそれぞれの周溝墓は互いの溝を連結、あるいは再利用することはなく、別個に営まれているものである。単位群の認定は調査範囲が狭いため確実なところはわからないが、重列タイプの群構成をなす中型の方形周溝墓の周辺に小型の方形周溝墓が存在する地域になりそうである。

主体部は遺構確認面の削平が著しいことと、方台部中央が調査区から外れているせい、何れも確実な主体部は確認できていないが、14号墓の方台部内には主体部らしい土坑が見られた。内部は自然堆積を示す土層を示すが、土坑墓になる可能性も考えられる。周溝内埋葬については、13号墓西溝内に長軸1.3mの長方形の土坑が見られた。土坑墓となるものであろうか。

出土遺物は、各周溝墓の溝内より弥生土器片がごく僅か出土しているにすぎないため、個々の方形周溝墓の確実な時期は特定できない。ただし、13号墓東溝より完形品の壺が底近くから1点横倒し状態で出土しており、白岩式古段階に該当するものであった。12・14号墓の周溝から破片ながら白岩式新段階に該当する土器が出土している。この土器の年代が築造時期としてもよいならば、13号墓が古く12・14号墓が13号墓の周辺に新しく築かれたことになる。

後期の方形周溝墓はSZ3・4の2基が検出された。全体の形態が分かるものは3号墓で、新しい遺構とかなり重複しているため確実な形態は不明であるが、中期以来の四隅に陸橋のある形態になる可能性が高い。4号墓については、北西コーナーは陸橋になるが、北東コーナーは浅くなりつつも接続し明確な陸橋とはなっていないため、3号墓とは異なる形態になる。

主体部は3号墓のみで第6次調査区内で発見されている。この主体部は、方台部中央に土坑が1基検出された。この土坑は長さ2.2m、幅1.5mを測る隅丸長方形の形態で、土坑壁際の底に小溝が一周することから、これが壁を固定する板の施設とすると、特殊な木棺となる可能性がある。底部分での長軸の内法は1.5mを測るため、成人ならばぎりぎり伸展葬可能な法量であろう。

溝内土坑については、3号墓の北西コーナー部分近くの北溝西端に接続するように位置している土

坑が存在し、本来は陸橋であった部分に造られた土坑墓とも推測された。しかし、この土坑内上層より7世紀中葉の須恵器が出土しているため、古墳時代後期の土坑になる可能性も高い。

周溝の形状は中期のものと比べると溝の深さや幅が一定でないこと、とくに3号墓では北溝に接続するようにSD12や西溝に上坑のような浅い落ち込みが見られることなど、周溝の再掘削があったことが考えられる。出土遺物についても3号墓で北溝や東溝北端、SD12から比較的高い完形率の高いものも含み、底部穿孔の小型壺も存在するが、大多数は破損した壺や高坏である。壺・高坏に器種が限定されるために周溝墓の祭祀に使われた土器群であると思われるが、基本的に再掘削された溝から出土している土器群の可能性が高く、周溝墓の当初の時期を示すものか検討を要する。出土した完形率の高い土器の時期は後期後半新段階となるが、中期後葉～後期前半の土器片も含むことと、前述した溝の再掘削の問題から後半新段階の築造時期となるかは検討を要する。取りあえず前半を含む後期全体の時期幅の中で考えておきたい。4号墓については後期古～後半新段階、さらに外来系の土器が出土しているが、主体時期は後期後半段階に属するものと考えられる。

土坑(SK)・井戸(SE1) 土坑は弥生～古墳時代の遺物を出土するものと江戸時代の遺物を出土するものに大きく分けられる。弥生～古墳時代の主要土坑はSK1・14である。検出された位置から見ると、3号墓の方台部内で溝の主軸方向とも合うためあるいは3号墓の主体部と考えられたが、古墳時代後期の上層が出土していることから、周溝墓の主体部とは考えられないものである。SK14についても埋上が古墳時代以前の土層を示すため古い時期と判断したが、弥生時代中期の方形周溝墓の方台部内にあるため、SK1と同様に古墳時代後期になると思われる。

江戸時代の上坑は方形で大型のSK14・16・17、小型で円形のSK15・SE1が検出された。大型土坑のうちSK16・17は平面4.5m×3.5m、深さ1.5～1mの規模の長方形の類似した形態の上坑である。SK16の南東隅の東壁幅1mの範囲で石垣が認められ、上部にも石段の最下段部と思われる石列の張り出しが認められ、これが取水場所ならば肥溜ないし水溜用の大型土坑と考えられる。SK4についても底に拳大の礫が埋め込まれており、やはり水溜用の大型土坑になると考えたい。

円形の土坑としては、SK15は直径1.8m、深さ0.6mを測る立ち上がりの比較急な円形の土坑で、SE1とはほぼ同規模、同形態の土坑である。SK15、SE1ともに恒常的な湧水を伴う井戸ではなくて、雨水に伴う湧水や溜水用の土坑や井戸と考えたい。

土坑の時期は、18世紀代の遺物も出土するが明治時代初期の摺絵の磁器も含むため、江戸時代末期の築造で、明治時代に廃棄されたと考えられる。SK16からは江戸時代末期の瓦が大量に出土しているため、近くの屋敷地の瓦葺建物を解体した際、廃棄物を投棄して埋めたと考えられる。

溝(SD) 溝状遺構は江戸時代末期～明治時代の区画溝であるSD6が検出された。

SD6は幅2.8～1.0mを測る溝幅が途中で変り一部蛇行する溝で、東西方向に掘られており、2本の溝が切り合うので2時期ありそうである。SD6から江戸時代末期の陶磁器と瓦なども出土することから見て、江戸時代末期～明治時代の屋敷地内部の排水用区画溝になると考えられる。

柱穴群(SP) 柱穴群に関しては掘立柱建物や竪穴住居の柱穴も含めて総数約100基の柱穴が検出できた。分布は明らかにSB7と8付近に集中し、他の部分ではまばらに見える。竪穴住居建設前後に古墳時代後期の掘立柱建物が存在していた可能性がある。古墳時代後期が主体と考えられる上師器や須恵器を出土するものは、本調査区では総数約20基で、全体の数から見ると20%の比率となり他の調査区が平均30%以上を測ることから、やや少ない傾向にはなる。隣接の第6次調査区では周辺の古墳時代後期の竪穴住居と掘立柱建物の組み合わせは見られるため、本調査区でも掘立柱建物が存在していた可能性は高いと思われる。

2. 遺物

本調査区の遺物は、弥生時代中・後期、古墳時代後期、奈良時代、平安時代、江戸時代末期の製品が出土しているが、弥生時代後期後半の土器が主体である。

弥生時代～古墳時代初頭の遺物

土器 弥生時代については中期と後期の土器が出土している。個々の資料について説明する紙面もないので、一括性の高い土器についてのみ説明を加えていきたい。

本調査区からは中期中葉の土器は一括資料に該当するものはないが、SZ3北溝から1点の破片が出土している。134は竹管状工具による沈線文の施された細頸壺の肩部の破片であり、嶺田式に該当する壺の破片である。

中期後葉の土器はSZ3北溝、SZ12西溝、SZ13東溝、SZ14西溝から出土している。なお、SZ3北溝の土器は、おそらくSZ13南溝と重複した際に混入したものと考えられる。

壺については、無文ではあるが162のように肩部に屈曲をもつ嶺田式の形態を残したものの、61のように横楕円形の篋描文や、161のように細頸で横の飾描文に対して縦の区画を入れる文様が複数施されるものが古い要素で、白岩式古段階の様相を示す。これに対して62のような横の飾描文のなかに波状文が施されるものや、137のような単節の縄文が施される細頸壺は比較的新しい要素をもつものと思われる。163の刷毛目調整を良く残す壺に関しても白岩式新段階に該当すると思われる。

甕については、164の刷毛目調整の甕、165の白岩式新段階の台付甕の存在を指摘しうる程度で、良好な資料は出土していない。

高坏については153・154の内面突帯をもち、単純口縁のものは白岩式新段階の特徴を示す。

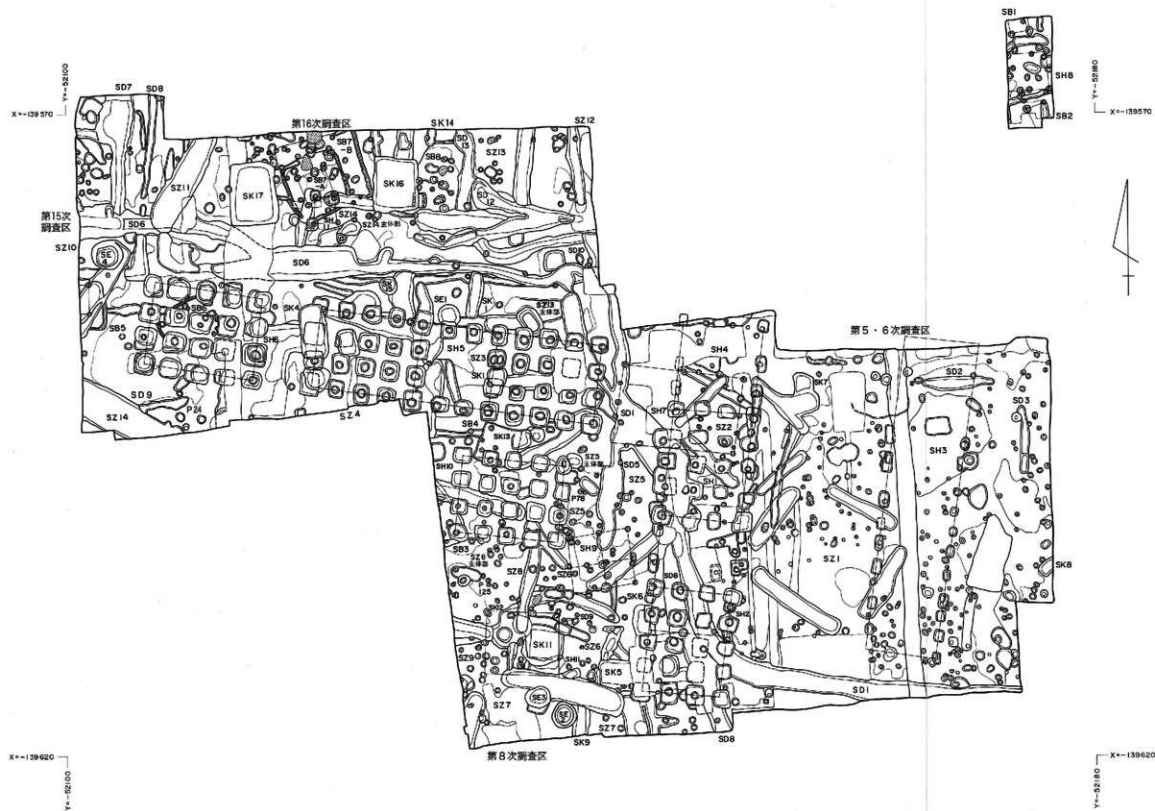
後期の土器は前半を2時期（古＝鶴松9次004、新＝鶴松3次SD1）、後半を3時期（古＝堀越ジョウヤマSD1、中＝土橋SK77、新＝色前田4号住）にわけて一括資料の検討をしてみたい。本調査地区ではSZ3、SD12を中心として、後半中～新段階の資料がまとまって出土した。

後期前半新段階の土器としては、壺として63の袋状の受口口縁になる細頸壺、64、65・69・70の横の突線文、横の刺突文や縄文の組み合わせになるもの、高坏は42、45～47のような脚部と坏部の接合部文様帯に横刺突文や突線文の施されたもの、甕としては121、130のように大きく外反するものがあげられる。ただし、高坏の横刺突文が複数条になるものは、後半古段階になる可能性もある。

後期後半段階の高坏は、17～19・39・48～55・77のように折返口縁になるものが基本で、浅い坏部と外に開く脚部下端の特徴が見られる。脚と坏部の接合部の文様は41のような横の一条の刺突文と羽状刺突文の組み合わせになるものは古い要素で後半古段階、19・48の所謂有段羽状刺突文の施されるものは新しい要素で中～新段階に該当する。

鉢は片口で受口口縁になり、口縁部が彎曲する38と直立する85・87、コップ形の33の3種類が出土している。33については、後期前半段階にも見られるが型式変化が乏しい器種である。151の口縁部が短く外反する小型の鉢は、もう少し小さなものが古墳時代初頭の小山角田1式段階（松井一明 1995）に良くみられるものである。

壺は単純口縁の23・28、折返口縁下部に指頭圧痕を顕著に残す折返口縁の24・27・31・73～76・78・79・81～84・101・146、受口口縁の72・80・86・190・191があげられる。広口のうち80・190は大型の壺になるうか。また、単純口縁の小型壺の系譜は、広口の29と、比較的細頸の30・105・106・136・193の2系統が出土している。これらの小型壺は赤彩されることが多く、今回底部穿孔土器も見られることから、祭祀専用の土器になる可能性もある。133については、古墳時代初頭に該当しそうな特徴を示す小型の丸底埴に該当しそうなものである。さらにこれらの壺のうち後半古～中段階になる



第14图 第16次发掘调查区全体图

ものは、肩部文様が有段化が顕著でない20、頸部が比較的長い27・135・148・149、口縁の開きが小さい23・28があげられるが、前半新段階の資料と同様に断片的なものとなっている。しかし、これらの資料以外の多くは後半新段階に該当していると考えられる。

なかでも、すでに述べたように151の小型鉢や133の小型土器のほか、32や189の口縁の外反度が弱く低い折返口縁になる壺については、古墳時代初頭の小山角田Ⅰ-Ⅰ式段階に該当する可能性があるもので、後半新段階の一部の資料は古墳時代初頭に降る製品を含む可能性も指摘しうる。しかしながら、古式土師器としての新形式の土器量は少なく大方は後期後半新段階に留まる資料であろう。

147の口縁部上端が平坦になり、底に短い羽状刺突、肩部にも短い羽状刺突文が施された広口壺？は菊川式には見られない形態で、外来の土器と思われるが産地は良くわからない。

壺については、良好な資料は少ないが、120・122～129・196のように口縁端部の造りが粗雑でくの字状口縁になるものが該当しそうである。

石器 弥生時代の石器のうち大陸系磨製石器はⅠの扁平片刃石斧のみが出土した。Ⅰは研磨調整が粗雑で、2次加工時の調整剥離面が顕著に残る中型の扁平片刃石斧である。形態も台形状になり余り丁寧な造りとはいええない。形態から見て当地域では中期後葉～後期前葉の時期に多く見られるものである。石材は変成岩系の形で類別は少ない石材であり、西遠江からの搬入品の可能性が高い。

古墳～奈良時代の遺物

須恵器・土師器 古墳時代の土器は、SB7やSK1などの土坑から出土しており、後期のものが多いとみられる。初頭期の土師器については、すでに述べたとおりSZ3北溝やSD12の中に小山角田Ⅰ-Ⅰ式に該当する資料が含まれている可能性がある。

6世紀代の須恵器としては、坏身・蓋である10と11、壺の口縁の7、12の壺の破片は遠江須恵器Ⅱ～Ⅲ期前葉（MT15～TK10並行）、198の坏身はⅢ期中葉（TK43並行）、5・6の坏身と169の甕はⅢ期後葉（TK209並行）になるものである。土師器についても8の高坏、9の広口壺、13の長胴甕は坂尻Ⅰ-Ⅰ～2期（MT15～TK10並行、松井一明 1995）、166は坂尻Ⅰ-4期（TK209）に該当するものが出土している。なお、11と12は地元袋井市衛門坂窯産の製品である。

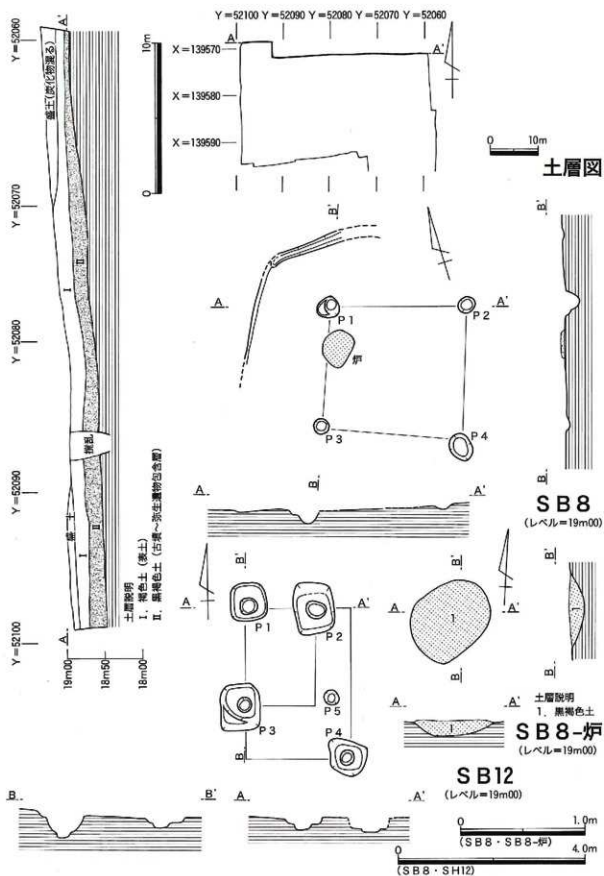
7世紀代の須恵器としては、坏身である142が7世紀前葉、143が7世紀中葉の製品になるものが出土しているにすぎず、14の甕などの破片数も含めても数は非常に少ない。

奈良時代の須恵器としては、4の8世紀中葉の坏蓋が1点出土しているのみである。

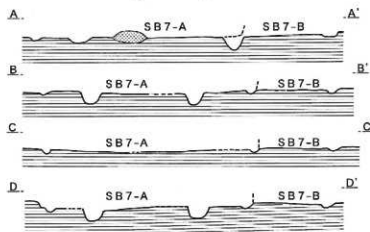
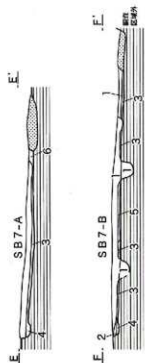
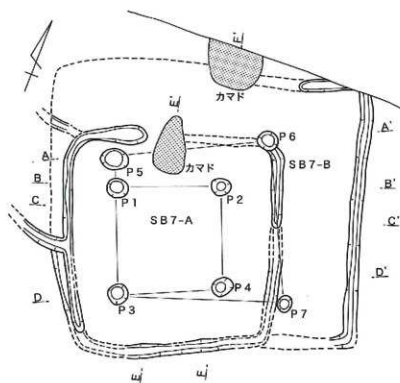
平安時代以降の遺物

平安時代の遺物は、182の清ヶ谷産の灰釉陶器碗の底部でⅣ-Ⅰ期（松井一明 1989）で10世紀末葉の製品、181の源美・湖西のⅠ-Ⅰ期（松井一明 1993）の山茶碗、170の東遠江系（金谷産）の山茶碗でⅠ-Ⅰ期の12世紀前葉の製品が、江戸時代末期の土坑から出土している。

江戸時代末期～明治時代の遺物は大型土坑や区画溝から出土している。SK16からは、肥前産の171・172の染付小坏、173・174・178の染付の蓋付茶碗と、175・176の染付鉢、177のなめし皿は19世紀前～中葉の製品、179は瀬戸産摺絵茶碗蓋で、19世紀後葉の製品でSK16の廃棄の時期を示すものとして注目される。180のかわらけは口径も10cmを超え立ち上がりも高く大きく外反する特徴から17世紀前葉の該当するものである（松井一明 1993）。溝から出土した183の志戸呂産摺鉢は18世紀代の製品、185の内耳鍋は17世紀代の製品、184の棧瓦も19世紀前葉に該当するものである。



第15図 土層 SB8・SH12 実測図

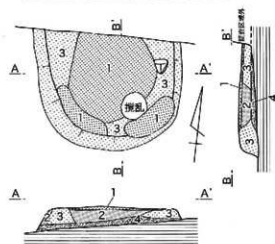


土層説明

1. 黒褐色土
2. // (黄色土ブロック多量を含む)
3. // (黄色土ブロック含む)
4. // (黄色土ブロック少量含む)
5. 黒色土 (褐色砂質土ブロック含む)
6. 黒色土 (燧石粒子少量含む)

0 4.0m

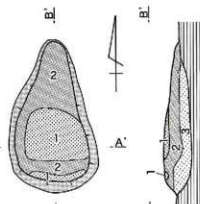
(SB7-A・B) SB7-A・B
(レベル=19m00)



SB7-B
カマド

(レベル=18m80)

1. 黒褐色土(多量の炭土ブロックと白色粘土含む)
2. // (多量の炭土ブロック含む)
3. // (少量の炭土ブロック含む)
4. // (黄色土ブロック含む)



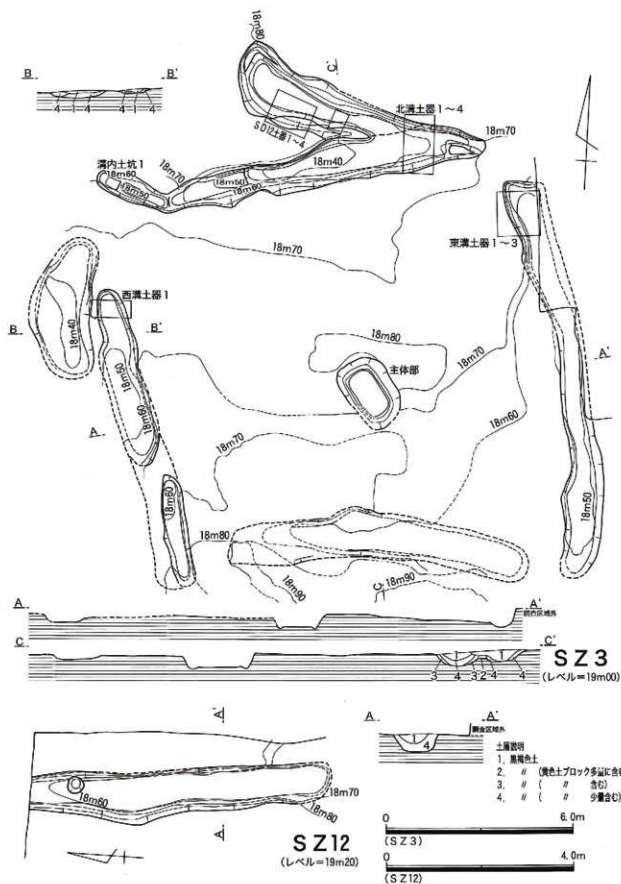
SB7-A
カマド

(レベル=18m80)

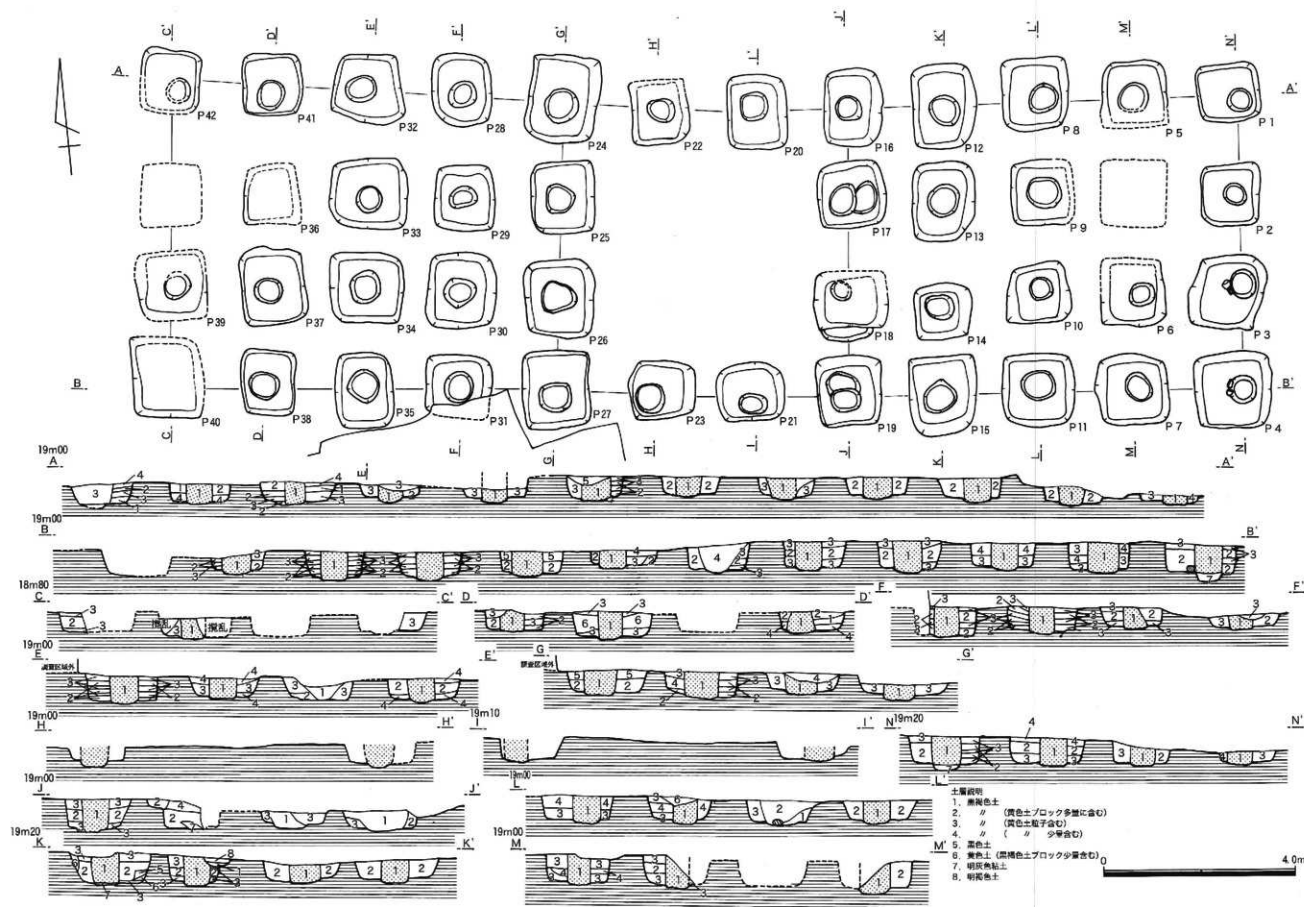
0 1.0m

(SB7-A・Bカマド)

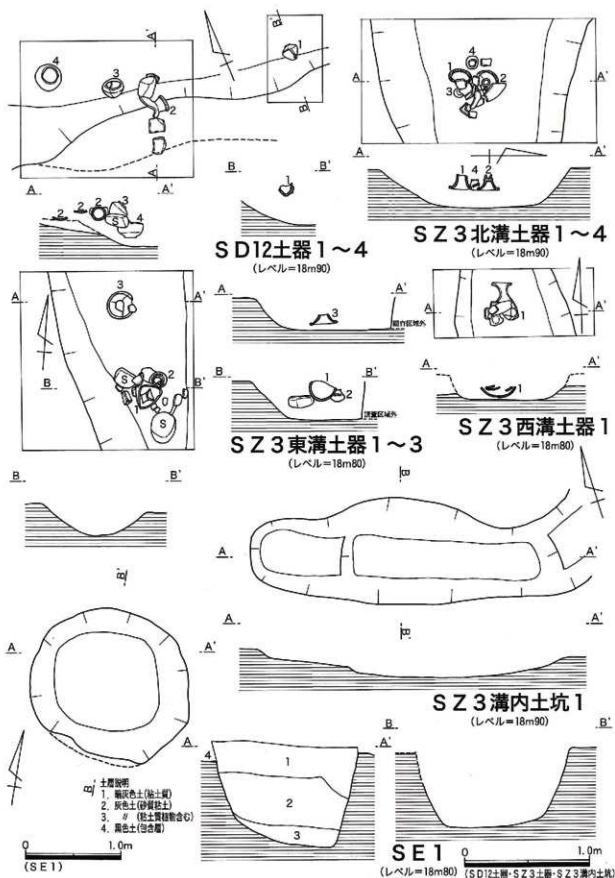
第16図 SB7-A・B 実測図



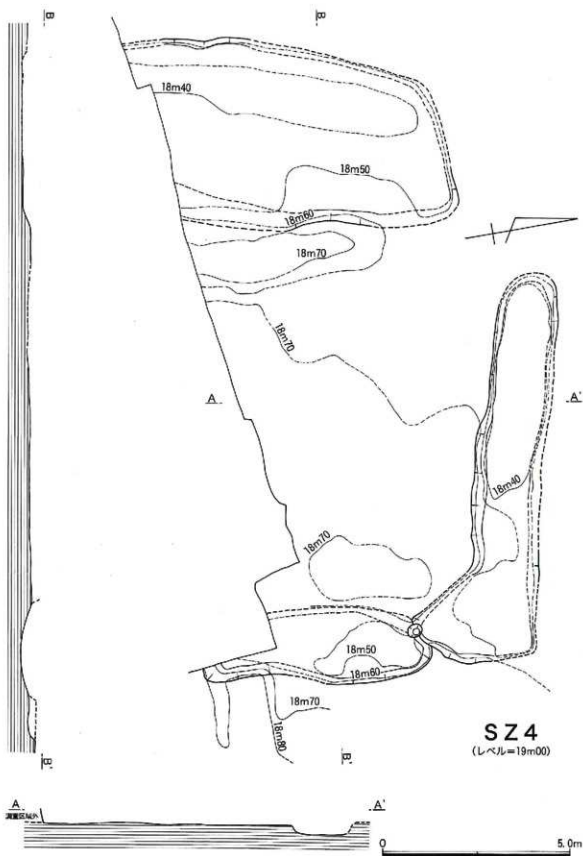
第17図 SZ3・SD12 実測図



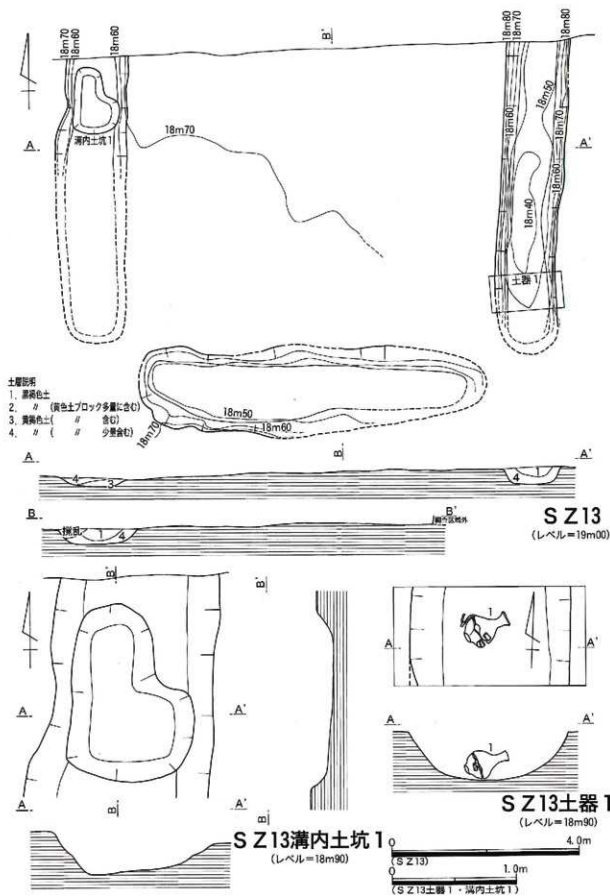
第18図 SH5実測図



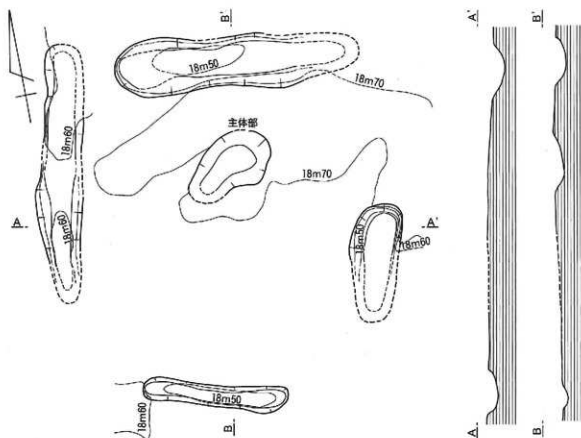
第19図 S Z 3土器出土状況・溝内土坑 1 SD12土器出土状況 SE 1 実測図



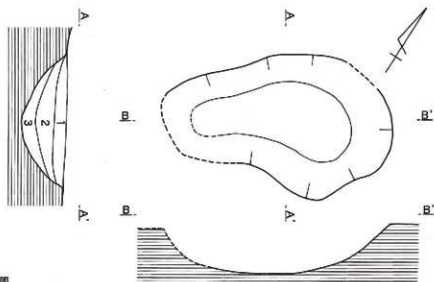
第20図 SZ4実測図



第21図 S Z13実測図



SZ14
(レベル=19m00)



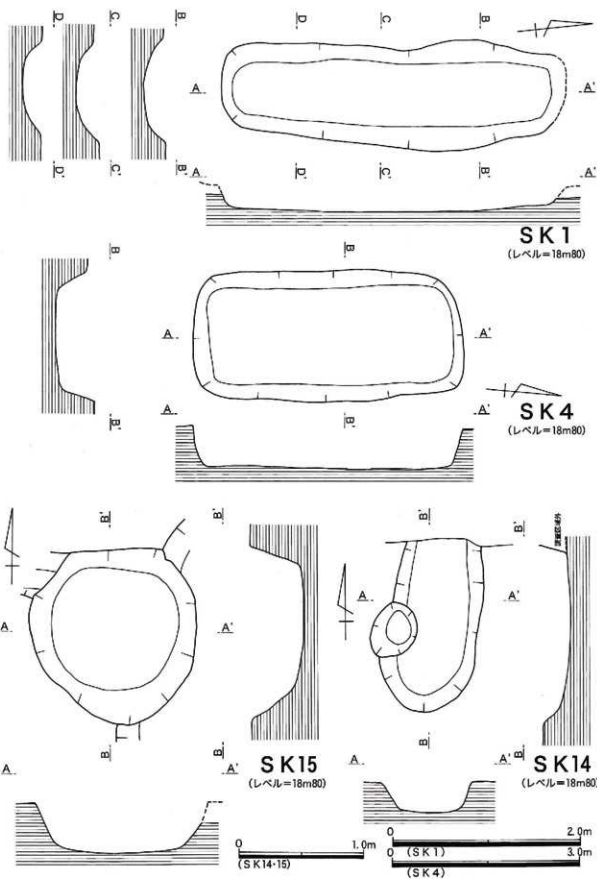
SZ14主体部
(レベル=18m80)

土層説明

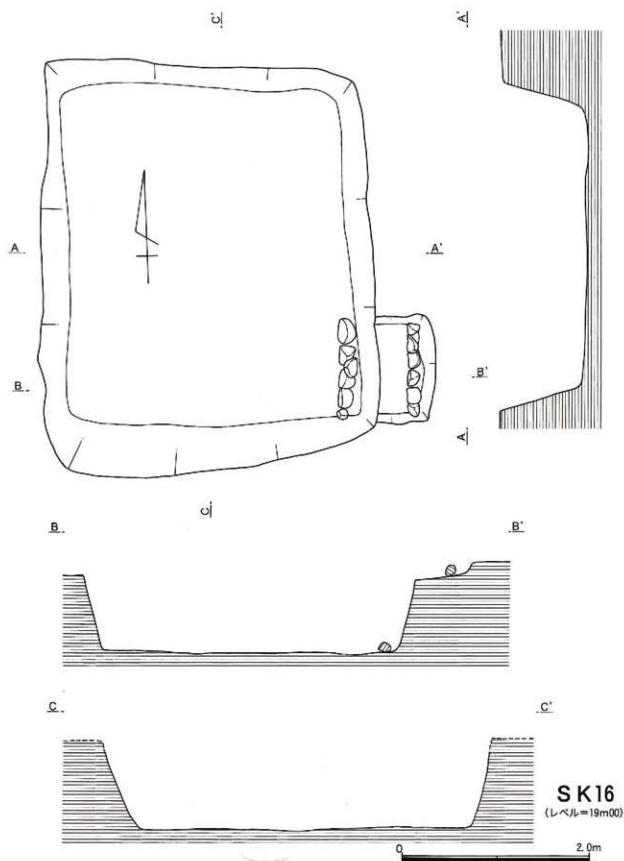
1. 黒褐色土 (黄色土ブロック少量含む)
2. 黒褐色土 (// 多量に含む)
3. 黒色土



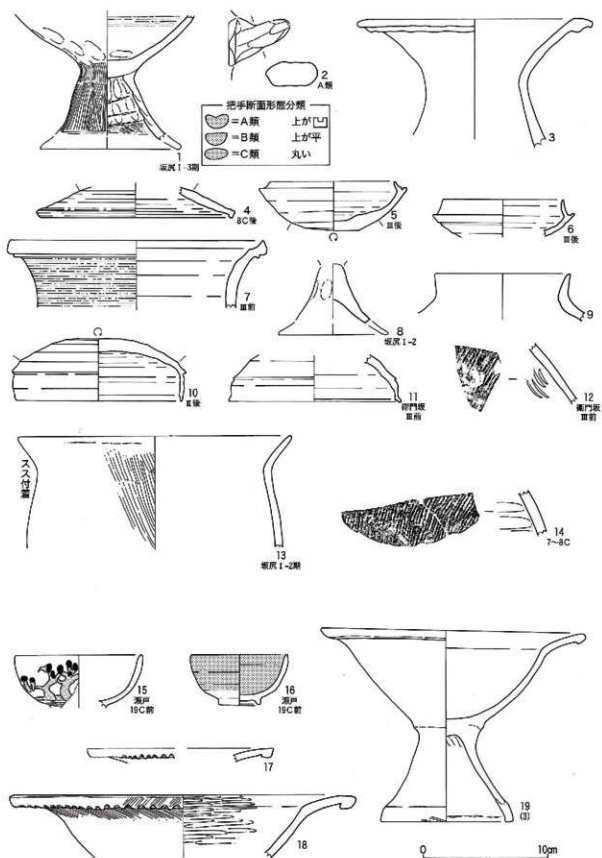
第22図 SZ14 実測図



第23図 SK 1・4・14・15 実測図



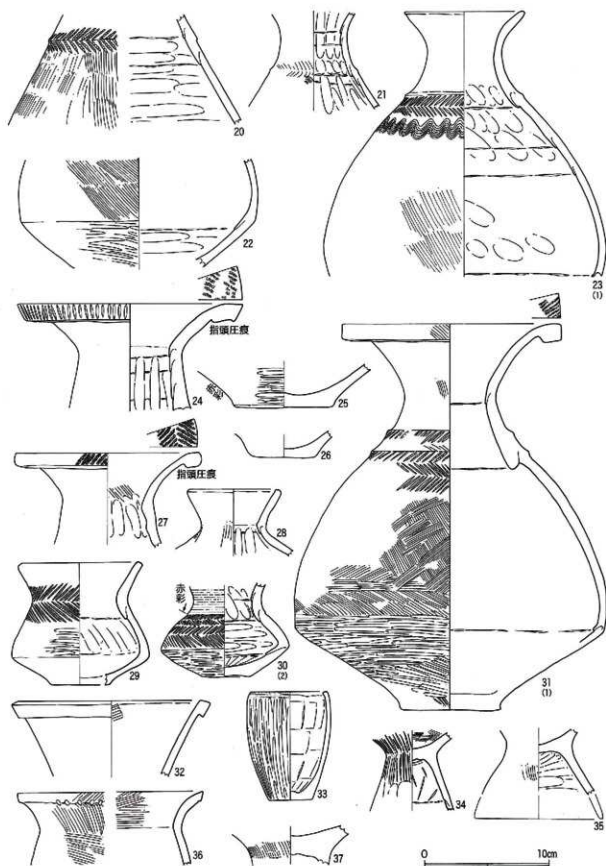
第24図 SK16実測図



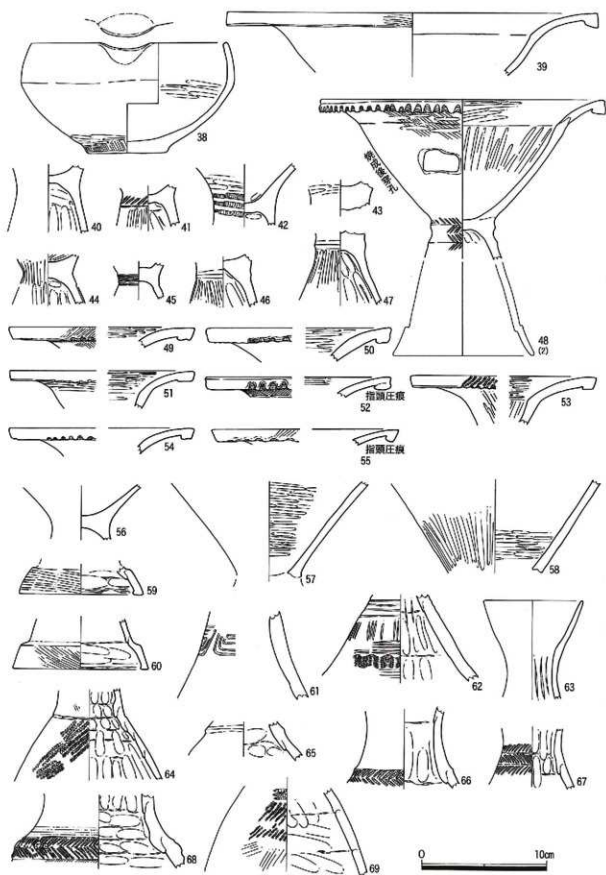
※()内は遺構平面図Noと一致する。

第25図 土器実測図 1

1・2=SB7 10~12=SB7-B 13・16=SH9・P17
 3=SB7内 11=SB7-B274内 17~19=SB23B
 4~9=SB7-A 14=SH9・P10

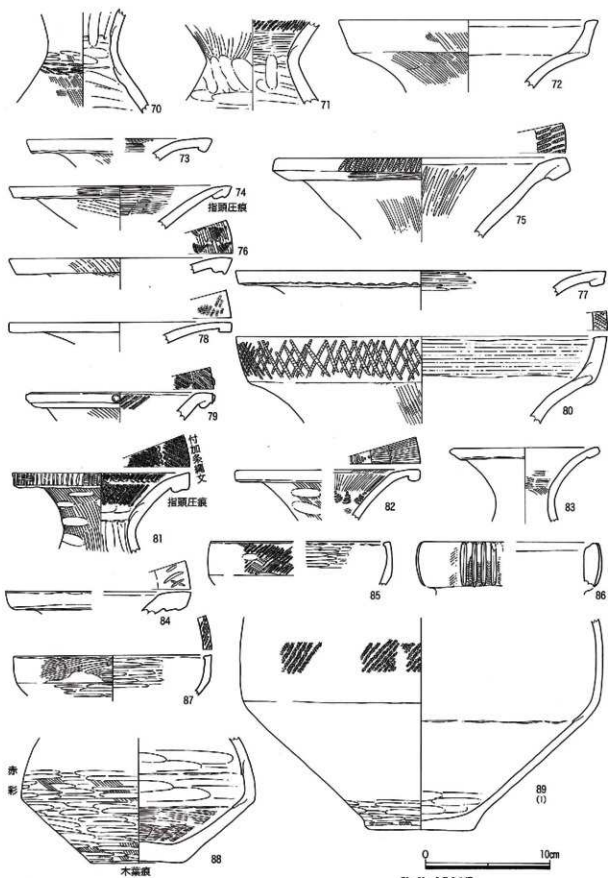


第26圖 土器実測図2

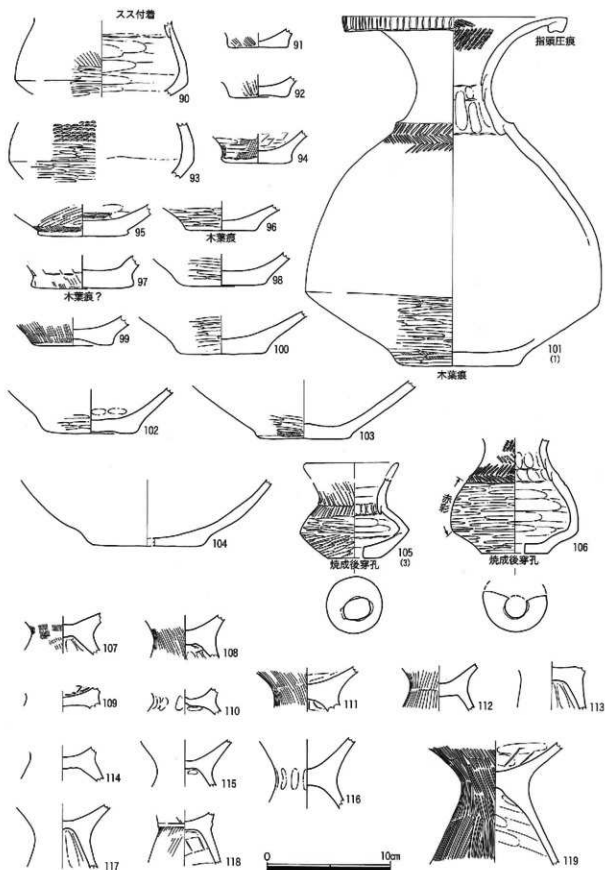


第27图 土器夹测图3

38—S Z 3 東清 40~69—S Z 3 北清
39—S Z 3 西清

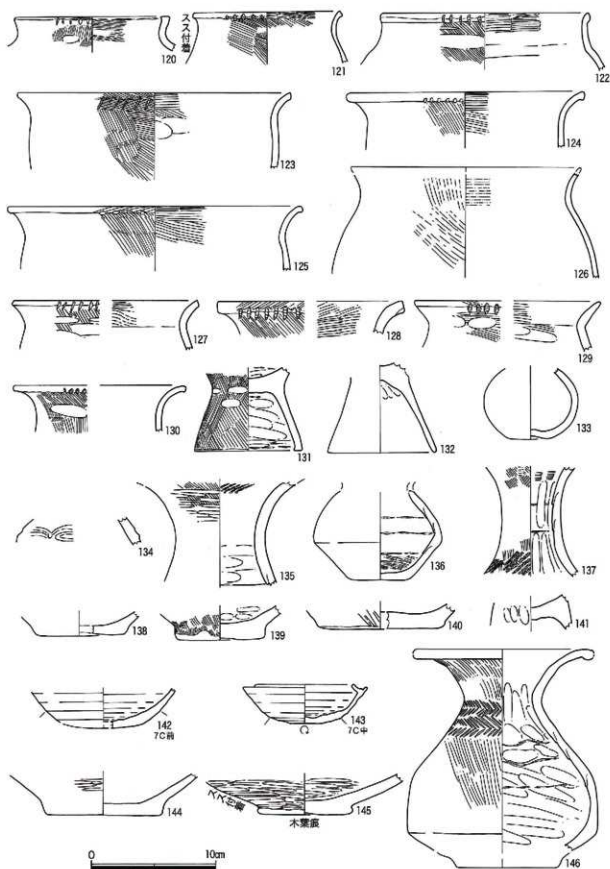


第28图 土器実測図 4



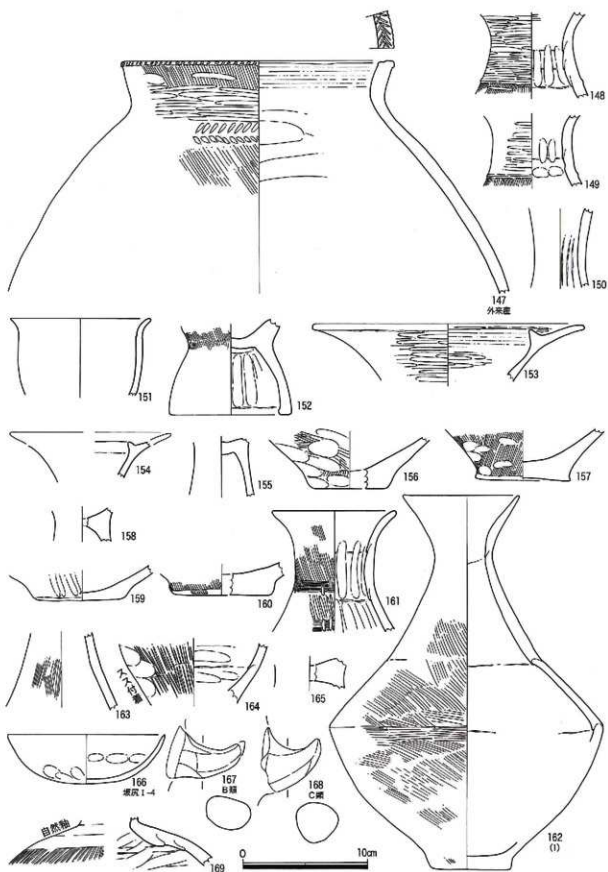
90~119=S Z 3北端

第29図 土器実測図5



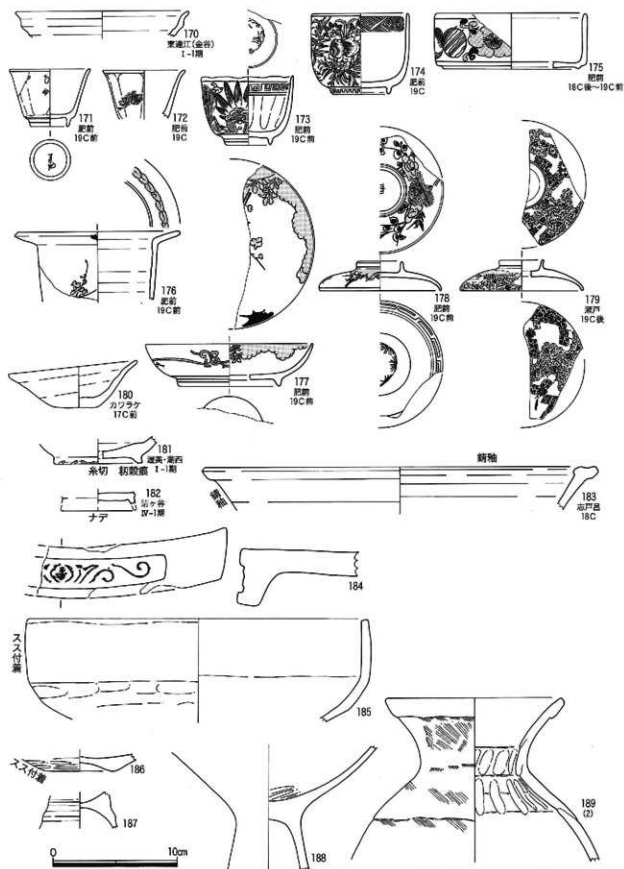
第30図 土器実測図 6

120~133=S Z 3北溝 140~143=S Z 3北溝西段
134~139=S Z 3北溝下層 144~146=S Z 4南溝



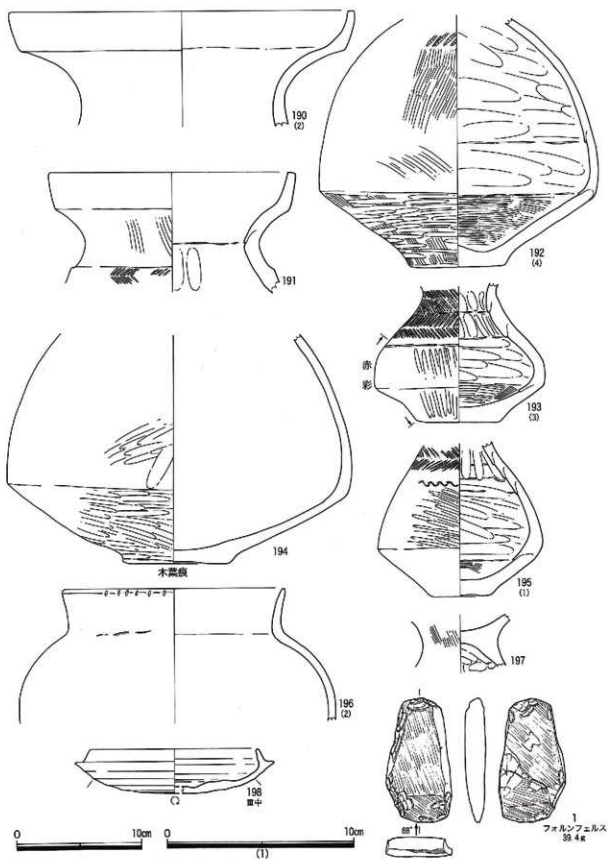
第31图 土器实测图7

147 = S Z 4 鼎足 153 ~ 156 = S Z 12 鼎腹
148 ~ 150 = S Z 4 西底 159 ~ 162 = S Z 12 鼎腹 167 ~ 169 = S K 4 北平
151 ~ 152 = S Z 4 北底 163 ~ 165 = S Z 14 鼎腹



第32図 土器実測図8

170~179=S K18 185=S D10
 180=S K23 186=S D11
 181~184=S D6 187~189=S D12



第33図 土器実測図9 石製品実測図1

190~196 = SD12 195 = 割金器
197 = SD13北端 1 = S 23 北端

第6章 第17次発掘調査

1. 遺構

土層 今回の調査区では住宅地であったため建物の解体に伴い包含層の保存状況は悪かったが、遺構面まで到達する擾乱は少なかった。用地の東端では庭地になっていたせいか包含層が少し残存し、厚いところで30cm、薄いところでは20cm程度、平均20cmの弥生～古墳時代後期の包含層が20cmの表土の下に存在した。さて、遺構の地山面である黄褐色土上面のレベルは、調査区内では南側で高くS D 2を境に北側が僅かに低くなり、高低差で最大30cm程度であった。

竪穴住居(SB) 竪穴住居はS B 2の1棟が検出された。検出された場所は調査区南端で、住居の中央部分の大半は調査区域外になるが、壁は半分近く検出することができたので大方の形態は判明した。この竪穴住居の床面は包含層と地山面の境の僅か下に営まれていたことから、壁溝の一部を検出することができた。規模は南北方向で一辺4.8mを測り、掛之上遺跡での古墳時代後期の竪穴住居としては普通サイズとなる。かまどについては保存状況が悪く明確ではなかったが、北壁付近の中央より西に少しずれた床面に焼土面が見られ、住居外にも焼土の詰まった浅い小穴が確認された。おそらくこれらの焼土はかまどの痕跡で、住居内の焼土がかまど本体の焚口部分の底、小穴の焼土は煙出の一部と考えられる。この住居の時期を決定しうる遺物の出土はないが、かまどをもつこと、古墳時代後期の焼成を示す無文の土器片が出土しているため、古墳時代後期の時期になると考えたい。

掘立柱建物(SH) 本調査区で検出できた掘立柱建物は、小規模な柱穴からなる1棟のみである。S H 2に関しては柱並びが悪く、掘立柱建物の組み合わせにならない可能性もあるが、比較的並びの良いP 1～9までを組み合わせと考へてみたが、調査区域外に柱並びが出てしまう可能性もあり、全容は明らかではない。分かった範囲では、南北行4mの規模になるため、古墳時代後期の掘立柱建物としては中規模になる可能性がある。時期についても特定できるものは柱穴内より出土していないが、古墳時代後期の特徴を示す土師器の破片やふいごの羽口の破片が出土している。

方形周溝墓(SZ) 方形周溝墓らしい溝の組み合わせは第2次調査区で検出されたS Z 1の北と西溝の続きが検出できたが、東溝はさらに調査区域外に存在するものと考えられる。規模は方台部で南北10mを測ることから、中型に該当する。平面形態は四隅に陸橋をもつ形態になる可能性が高く、掛之上遺跡を始めとする東海・南関東型中期方形周溝墓の一般的な形態を示すものと思われる。

主体部は遺構確認面の削平が著しいことから、確実な主体部は確認できていない。S K 17は土質から見て江戸時代の土葬墓であると考えられる。周溝内埋葬については、南溝内にそれらしい落ち込みが確認できたが、調査区の境になるため全体の形態は分からなかった。

出土遺物は、各溝内より弥生土器片がごく僅か出土しているにすぎないため、個々の方形周溝墓の確実な時期は特定できないが、第2次発掘調査区において西溝より完形品に近い壺が底近くから少し浮いて3点、台付壺1点が横倒し状態で出土しており、白岩式新段階に該当するものであった。今回出土した2と4の壺と3と6の台付壺についても、縦方向の櫛描文の多様のあることや、台付壺の長胴の形態から見て破片ながら白岩式新段階に該当するもので、西溝出土の土器と時期の矛盾はない。

土坑(SK) 土坑は弥生～古墳時代の埋土の色調を示すものと、江戸時代の色調、遺物を出土するものに大きく分けられる。前者の主要土坑はS K 18である。検出された位置から見ると、1号墓北溝の一部と切り合うため、周溝墓に関係した土坑とも考えられるが、長軸2mを測ること、第2次発掘調査区でも類似の規模の土坑が見られること、古墳時代後期の土師器が出土していることから、古墳時

代後期の土坑に該当するものと考えられる。

S K14は埋土から見て江戸時代の土色を示すことと、第2次発掘調査区で寛永通宝を出土した土坑と形態が類似すること、隣接のP2からかわかけが出土していることから見て、江戸時代の土葬墓と考えたい。時期は不明であるが、P2から出土しているかわかけは17世紀代のものと考えられる。溝(SD) 溝状遺構は江戸時代末期～明治時代の区画溝であるSD2～4が検出された。

SD2～4については幅2.0～0.8mを測るいずれも東西に掘られた区画溝である。遺物は少ないがSD2から18世紀代の陶磁器が出土しているため、いずれの溝も江戸時代末期～明治時代の畑地の排水用区画溝になると考えられる。

柱穴群(SP) 柱穴群に関しては掘立柱建物や竪穴住居の柱穴も含めて総数約30基の柱穴が検出できた。分布は明らかにSH2付近に集中するが、全体量は然程多くならない。古墳時代後期を主体と考えられる土師器を出土するものは、本調査区では総数約5基で、全体の数から見ると16%の比率となり他の調査区が平均30%以上を測ることから、やや少ない傾向にはなる。隣接の第2次発掘調査区では古墳時代後期の竪穴住居が見られることから、本調査区のSH2の掘立柱建物や柱穴群が組み合わさっていた可能性は高いと思われる。弥生時代中・後期では墓域になっていたと推測される。

2. 遺物

本調査区の遺物は、弥生時代中期、古墳時代後期、奈良時代、江戸時代の製品が出土しているが、全体量は極めて少ない。参考までに第2次発掘調査区の1号墓西溝の資料を転載した。

弥生時代の遺物

土器 弥生時代については中期と後期の土器が出土している。一括資料はなく参考資料とした第2次発掘調査区の1号墓西溝出土の土器がまとまって良好なものである。

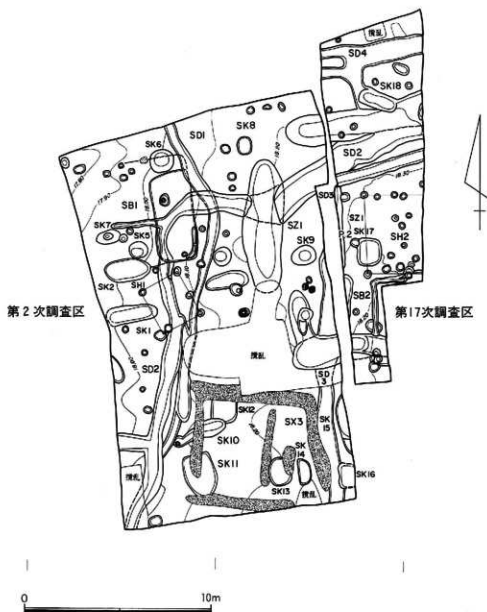
本調査区からの中期の土器は、SZ1北溝から後葉の破片が出土している。2は篋描文による横線文と縦の区画、4については櫛描文による横線文と縦の区画文が施されるもので、前者はやや古い様相を示すが後者については白岩式新段階の資料と考えられる。3・5・6については、荒い刷毛目調整の台付甕で、参考資料の4に該当するものであろう。参考資料については1の小型の壺、2・4については比較的大型の壺である。1・2ともに後期前葉に良く見られる無花果型の器形をしており、とくに1については頸部に一条の突線が巡るもので、後期的な様相を呈しており白岩式新段階の中でも後期に近い一群になりそうである。3については球形に近い胴部でかなり細い頸部を呈しているが下膨れ形態の白岩式新段階に該当するものであろう。4については口縁部が緩やかに大きく外反するもので、鉢形台付甕の変化したのと考えられる。第1次発掘調査区でも刷毛目調整後条痕仕上げになる同形態の台付甕が出土している。

古墳時代以降の遺物

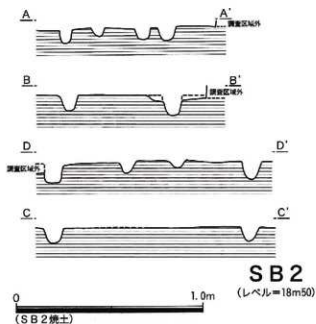
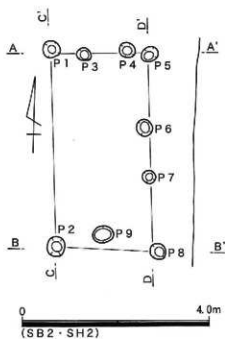
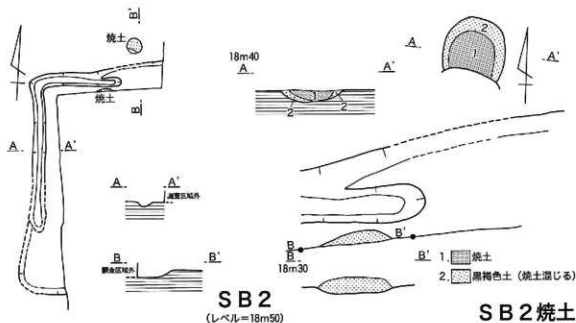
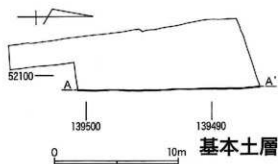
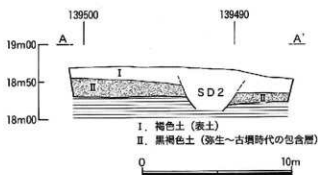
古墳時代の土器は、形態不明の破片以外は古墳時代後期に該当する7の甕や鍋の把手が出土したのみである。S K18出土であるため付近に存在するSH2等に関連したものであろう。

奈良時代の須恵器としては、坏身底部である11が出土している。高台底部より底部が張り出す8世紀初頭の形態をもつものであろう。

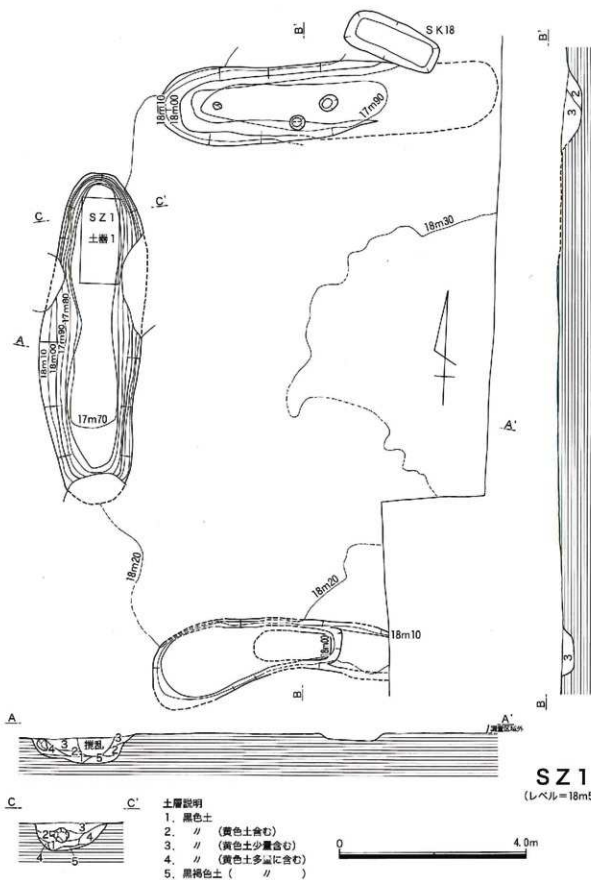
中・近世の陶器・かわかけとしては、10が瀬美・湖西産山茶碗の1～2期(12世紀後葉、松井・明1993)、1は扁平なかわけで17世紀代、9は志戸呂産の壺で18世紀代、12は瀬戸・美濃産の丸碗の底部で18世紀代の製品と考えられるものが出土している。



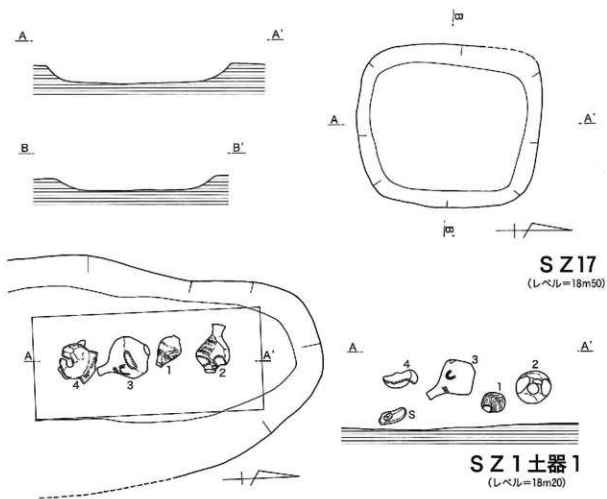
第34図 第17次発掘調査区全体図



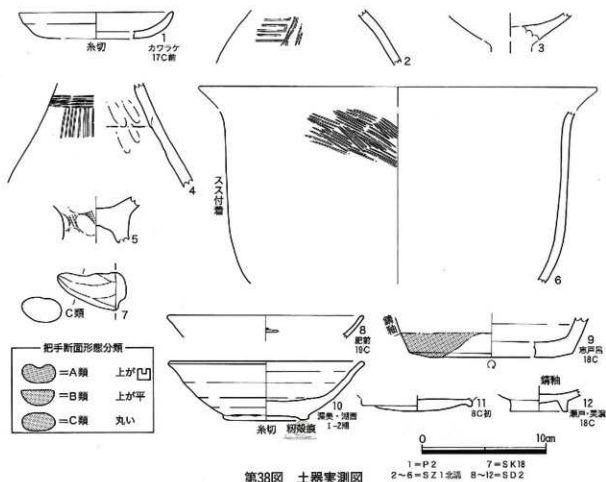
第35図 基本土層 SB2 SH2 実測図



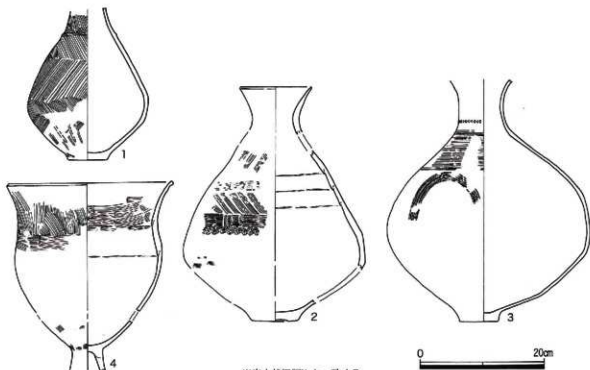
第36図 SZ1 実測図



第37図 SZ1土器1 SK17・18 実測図



第38図 土器実測図



第39図 第2次発掘調査区S Z 1 西溝出土土器実測図 (参考資料)

第7章 ま と め

今回調査した第13・16・17次発掘調査区では、弥生時代中～後期、古墳時代後期、奈良時代の良好な遺構、遺物を確認することができた。本章では報告書作成のための時間制約もあることと、第16次発掘調査区については官衙関連遺構が主体となるため、官衙関連遺構が主に検出された第14・15次発掘調査区の成果が掲載された報告書7で、第13次発掘調査区についても弥生時代の竪穴住居などの居住域関連の調査となるため、同様な遺構が多数検出された第18次発掘調査区の成果が掲載された報告書8で詳細な遺構の分析を行うこととした。本章では各調査区で得られた主要な成果を記述するに留めまともに代えることとした。

1. 第13次発掘調査区の様相

弥生時代中期の遺構としては、小型の上坑のSP132～134から土器片がまとまって出土した。SP132では中期後葉の白岩式新段階の土器片が混じるが、SP133・134からは中期中葉の嶺田式の土器片のみが出土している。掛之上遺跡では目下のところ、嶺田式の住居跡は発見されていないが、隣接の大門遺跡第4次発掘調査区から方形の竪穴住居1棟が検出されている。嶺田式の遺構としては第12次発掘調査区において方形周溝墓と土器棺、第18次発掘調査区から小型の土坑や小穴から土器片がまとまって出土している状況が認められた。第13次発掘調査区からこのような土坑・小穴が検出されたことから見ると、中期中葉段階の建物が付近に存在していたものと考えられるが、明確な竪穴住居跡がいまだに確認できないことから、後世の遺構に攪乱されているものと考えられる。

白岩式の竪穴住居は第13次発掘調査区からは、確実なものは見えていなかったが、第7・9・18次発掘調査区で検出された白岩式新段階の竪穴住居は楕円形の平面形態のものであった。本発掘調査区からは、白岩式の新段階の土器片はSB1や土坑内から散見されるので、近くに建物があった可能性は高いだろう。このように、現在のところ中期段階において明確な建物遺構が検出されるのは、白岩式新段階からであるが後期の遺構数に比べると少ない。墓域から見ると、中期の方形周溝墓は嶺田式段階になる可能性のあるものは1～2基程度の検出に留まるが、白岩式段階ではすでに50基以上おそく100基以上の数に登る可能性が高まっている。中期の建物が後期の遺構と重複して破壊されている可能性はあるものの、方形周溝墓に見合った数の竪穴住居は検出できていない。

弥生時代の遺構が増加するのは後期前半段階からである。今回も、SK8を始めとした後期前半段階の土坑や、後期後半段階のSB1などの竪穴住居が発見された。竪穴住居については遺物の出土するものが少ないうえに、全体の平面形態が不明であったため、確実な時期は分からないが隅丸方形を呈することから見て、後期後半段階の時期と考えてみた。

比較的まとまって土器片が出土したSK8の土器の内容については、後期前半新段階を中心とするが、前半古段階や後半古段階の特徴を持つものも存在している。土坑の形態も、SK8ばかりでなくSK3も円形で立ち上がりも急であるため、これらの土坑は屋外の貯蔵穴の可能性を指摘できた。

古墳時代後期の明確な遺構は少なく、本発掘調査区内には建物単位群の周辺部と考えられる。奈良時代の遺構についても、確認できず遺物が少量出土したにすぎないことから、郡衙中枢地域ではなく周辺建物も少ない場所であったと考えられる。

平安時代末～鎌倉時代の遺構・遺物は増加する。組み合わせになる掘立柱建物の柱穴から、山茶碗の破片や、SK2・5のような土坑墓は副葬品から中世墓と考えられ、鎌倉・戦国時代の遺物が出土

する区画溝であるSD1なども検出された。今までの調査区の中では、最も多くの中世の遺構・遺物が検出されている調査区である。SD1は区画溝としては幅2m、深さ0.3m程度で比較的小規模の大きなものであるが、立ち上がりは緩やかな溝であることから、居館の外郭を区画する溝というより館や居住区内部の排水を兼ねた区画溝と考えられる。11世紀後葉～12世紀代に該当すると思われる瓦の小破片も出土しているため、瓦葺の建物が掛之上遺跡の何処かに存在していた可能性がでてきた。

中世墓については、山茶碗が出土したSK2から13世紀前葉の時期が考えられたが、掘立柱建物との時期差についてはわからなかった。同時に存在したものなら屋敷墓になるが、SK5や包含層から小刀が出土していること、隣接地の試掘調査から和鏡やかかわらけを伴う階層性の高い土坑墓が検出されているため、12～13世紀前葉までが墓域でその後居住域になったと理解されるのであろうか。

2. 第16次発掘調査区の様相

弥生時代の遺構としては、中期の方形周溝墓3基、後期の方形周溝墓2基が検出され、中～後期の墓域となっていた発掘調査区であったことが判明した。中期の方形周溝墓2基は中型であるが、1基は小型である。中期の方形周溝墓の平面形態は全形態が判明したものはないが、東海地域に特徴的な四隅に陸橋をもつ形態が主体となる。中期の3基の周溝墓は溝が切り合わない連接式の群構成をなしているため遺構の切り合い関係からの築造順位は分らないが、出土土器から見ると13号墓が白岩式古段階と最も古く、続いて12号墓と14号墓の白岩式新段階の順に造墓が進んだと思われる。

後期の3・4号墓については、第6次発掘調査区で検出されていたものの続きで、3号墓についてはほぼ全形態が検出できた。周溝の形態が他の遺構との切り合いで今一つ明確ではないが、四隅に陸橋を残す中期以来の古式な平面形態を継続して採用されていた。主体部は中央に1基検出され、内部に壁溝を持つ特異な木棺を採用していた。土器としては、3号墓で後期後半段階の土器が、北・東溝を中心として比較的多量に出土している。出土した土器は、底部穿孔の小型壺を含む壺・高杯の破片を、まとめて投棄したような出土状況を示している。中期段階の方形周溝墓の周溝内の土器の出土状況は、完形率の高い壺を1個程度を使用する内容とは明らかに異なる。おそらく後期段階底部穿孔の土器が安定的に出現すること、多くが破片で出土すること、壺と高杯を主に出土することから見て、中期から後期後半にかけて周溝墓で行われた土器祭祀の内容が変化したことが明らかとなった。

古墳時代では前期の堅穴住居らしいものが検出されたが、詳細な時期と内容については遺構の残存状況が悪かったため明かにできなかった。従来の調査区でも弥生時代後期と比べると、前期の遺構・遺物量は激減し、明確な建物遺構は良く分かっていない。墓については隣接の第9・19次発掘調査区で方形周溝墓1基が、弥生時代後期の居住域の中に検出されている。弥生時代においては基本的に墓域と居住域は明確に分けているのに対して、古墳時代前期には居住域の中に墓を造る行為があったと考えられるならば、弥生時代後期から古墳時代初頭に大きな集落構造の変化があったと言える。古墳時代前～中期については遺構内容は分らないが、土器や古式須恵器が出土しているため明らかに集落は継続している。古式須恵器の出土量は増加し、袋井市域でも有数の遺跡になりつつある。

古墳時代後期になると、第5・6次発掘調査区で1～2棟の堅穴住居と1～2棟の掘立柱建物が増え、組み合わせで検出される地区や、第1・7・11次発掘調査区のように柵列で囲まれ内部が掘立柱建物のみで構成される居館部、堅穴住居のみの場所等、多様な構成を呈している。おそらく集落内部の階層性を表す構成と考えられる。墳墓に関しては、付近に6世紀前葉の大門大塚古墳等の首長墓や、地蔵ヶ谷古墳群・横穴墓、岡子塚古墳群などの階層性を見ることが出来る後期群集墳や横穴墓群が多数分布している。第16次発掘調査区からも6世紀前～後葉の堅穴住居が検出された。6世紀前葉段階の堅穴

住居にかまどが見られ、当地域では比較的古いかまどに該当する。掘立柱建物との組み合わせは良く分らなかったが、周辺にそれらしい柱穴群が分布していた。しかし、遺構の密度は少なかった。奈良時代の遺構については、SH5など郡衙正倉規模の建物が検出されたが、正倉地区を区画する施設については検出されなかった。SH12が正倉地区を区画する堀に付属した門の施設として認定することが可能ならば、そこに区画ラインを設定することも可能になってよう。

江戸時代の遺構に関しては、末期の大型土坑や排水用の溝が検出できた。大型土坑に関しては、当遺跡では初めての発見となり、水溜や肥溜用と考えたがあまりにも規模が大きく他の用途も考えたほうが良いかもしれない。廃棄の際に埋土の中に多量の瓦が含まれていたので、付近に瓦葺建物が建てられていたと推測されることから、有力な屋敷地内に営まれていた土坑と考えられる。

3. 第17次発掘調査区の様相

第2次発掘調査区の隣接地で、弥生時代中期の方形周溝墓1基、古墳時代後期の掘立柱建物1棟などが主要遺構であった。

方形周溝墓は、第2次発掘調査区の続きではあるが、四隅に陸橋をもつ形態の方形周溝墓になる可能性が高まった。土器については第2次発掘調査区の西溝から、完形率の高い壺3点、台付壺1点が出土している。掛之上遺跡の中期方形周溝墓で、4点もの完形率の高い土器が出土した例は少なく、現在のところ第1次発掘調査区8号墓の4点が知られているにすぎない。出土土器は、白岩式新段階の中でも新しい要素をもつもので、後期段階に至る過渡的様相を示すものであった。出土土器は、溝の底よりかなり高いレベルで出土していることから見ると、方形周溝墓築造時の祭祀に使われたというよりも、ある程度溝が埋まった後に祭祀が行われて廃棄された結果と考えられる。

弥生時代後期の遺構は少なかった。第2次発掘調査区で発見された後期の土坑墓と思われる土坑についても、今回の調査で古墳時代後期の土坑になる可能性ができた。従来の掛之上遺跡における発掘調査結果の通り弥生時代中期の墓域のなかで後期の遺構数は少なく、中期の方形周溝墓の空閑地に後期の方形周溝墓が築造されていることを追認するものであった。

古墳時代後期については、堅穴住居と掘立柱建物の組み合わせで検出することができた。隣接地の第2次発掘調査区でも、古墳時代後期の堅穴住居と掘立柱建物の組み合わせが確認されている。さてそれぞれの該当時期であるが、出土遺物が少なく確実な時期の判断はできなかったが、建物の軸方向は合うため同時期と考えた。付近の第1・7次発掘調査区では、6世紀前半（TK10段階）に掘立柱建物のみから構成される居館部が形成されるが、一世代程度の期間しか営まれたにすぎず、TK10段階の中で堅穴住居が再び建てられていく状況が明らかとなっている。よって、本調査区の堅穴住居についても6世紀中葉（TK43段階）以降のものとなろうか。なお、第2次発掘調査区で検出された古墳時代後期の堅穴住居のかまど付近からは、6世紀末葉（TK209古段階）の須恵器が出土しているためその前後になる時期の可能性が高いと思われるが、堅穴住居の未発掘地区が多いため今後の調査結果によっては年代が変更されるであろう。

江戸時代では17世紀代の土葬墓らしいものが発見された。第2次発掘調査区でも新寛永通宝が出土した土葬墓が発見されているため小規模な江戸時代の墓地在営まれていた可能性ができた。ちなみに、中世墓に関しては、鎌倉時代のものが第13次発掘調査区、空町～戦国時代のものが第1次発掘調査区から発見されており、掛之上地内で中～近世にかけて継続的な墓地の築造を辿ることができた。

【参考文献】

- 袋井市教育委員会他 2001 「第1次発掘調査の遺構と遺物」『掛之上遺跡Ⅶー袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書2ー』
- 袋井市教育委員会 1983 「掛之上遺跡Ⅱー袋井市掛之上遺跡第2次発掘調査報告書ー」
- 袋井市教育委員会 1995 「掛之上遺跡第3次調査報告」『大門遺跡Ⅴー大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書ー』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998 「掛之上遺跡ー平成9年度二級河川原野谷川社会環境基盤重点河川事業(地方特定)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー」(第4次発掘調査)
- 袋井市教育委員会他 2000 「掛之上遺跡ー平成11年度袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書ー」(報告書1・第5次発掘調査)
- 袋井市教育委員会他 2001 「掛之上遺跡Ⅶー袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書2ー」
- 袋井市教育委員会他 2002 「掛之上遺跡Ⅵ・Ⅶー袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書3ー」
- 袋井市教育委員会他 2002 「掛之上遺跡Ⅸ・Ⅹー袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書4ー」
- 袋井市教育委員会他 2002 「ー見えてきた昔の掛之上ーかけのうえ遺跡ー袋井市駅前第二地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書5(掛之上遺跡Ⅺ)ー」
- 袋井市教育委員会 1983 「大門遺跡ー大門Ⅰ遺跡第2次発掘調査報告書ー」
- 袋井市教育委員会 1988 「大門遺跡ー袋井市大門遺跡第4次発掘調査報告書ー」
- 袋井市教育委員会 1990 「大門遺跡Ⅴー大門Ⅰ遺跡第5次発掘調査報告書ー」
- 袋井市教育委員会 1993 「袋井の前方後門壇ー袋井の首長墓を考えるー」
- 袋井市教育委員会 1996 「高尾向山遺跡Ⅱ」
- 中野晴久 1994 「知多(常滑)古窯址群の山茶碗について」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター
- 藤沢良祐 1986 「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅴ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1986 「本業焼の研究(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤沢良祐 1986 「瀬戸古窯址Ⅱー古瀬戸後期様式の編年ー(3)」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅷ 瀬戸市歴史民俗資料館
- 松井一明 1989 「宮口古窯跡群と清ヶ谷古窯跡群における須恵器陶器生産の一考察」『静岡県の窯業遺跡』静岡県教育委員会
- 松井一明 1993 「遠江における山茶碗生産について」『静岡県考古学研究』No25 静岡県考古学会
- 松井一明 1993 「遠江のかわらけ編年」『久野城Ⅳ』袋井市教育委員会
- 松井一明 1995 「古墳時代前半期土器編年」「古墳時代後半期土器編年」「灰土遺跡ー遺物・総括編ー」袋井市教育委員会

写 真 图 版

図版 1

4～89＝第13次調査出土

4・9＝SB1北半上層

23～25＝P59

37＝P89

50＝P134

52・53＝SX1

65＝SK2

79・89＝SK8

遺物写真(1)

※Noは図版Noと一致する



4



9



23



24



25



37



50



52



53



65



79



89

図版2

94~178=第13次調査出土

94・103・108・138=SK8



94



103



108



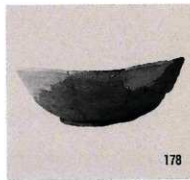
138



163



176



178

163=SD1南半

176=SD1南半下層

178=SD1北半下層

5~11=第13次調査出土

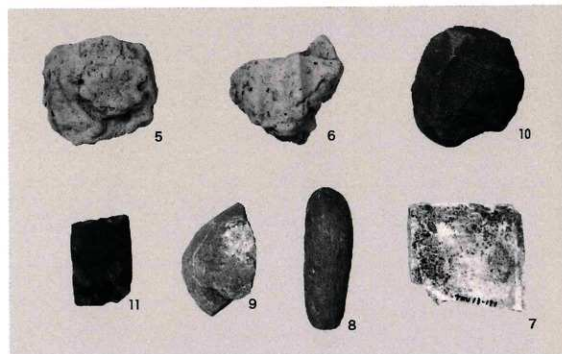
5・6=SX1

7=SD3

8=SB1

9=P58

10・11=SD1



5

6

10

11

9

8

7

3・5=第16次調査出土

3=SB7内

5=SB7-A

遺物写真(2)

(土器・石製品)

※Noは実測図Noと一致する



3



5

図版3

6～39=第16次調査出土

6=SB7-A

19～33=S Z 3東溝

39=S Z 3西溝



6



19



23



24



27



28



29



30



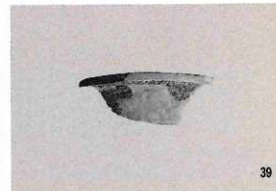
31



32



33



39

遺物写真(3)

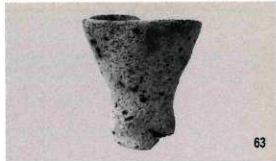
※Noは図版Noと一致する

図版4

48~136=第16次調査出土



48



63



72



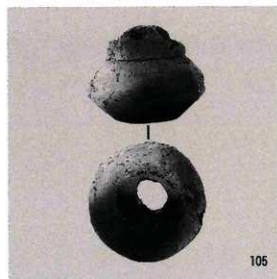
81



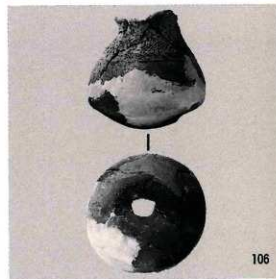
89



101



105



106



133



136

135~137=S Z 3 北溝下層



135



137

遺物写真(4)

※Noは図版Noと一致する

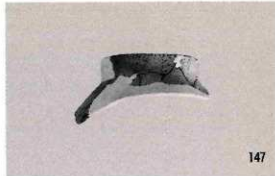
図版 5

146~190=第16次調査出土

146・147=S Z 4 東溝



146



147

161・162=S Z 13 東溝



161



162

166=S K 1



166



174

174~177=S K 16



176



177

180=S K 20



180



188

188~190=S D 12



189



190

遺物写真(5)

※Noは図版Noと一致する

図版 6

191~198=第16次調査出土

191~196= S D 12



191



192



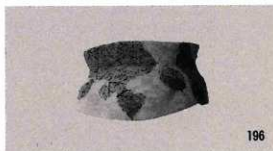
193



194



195



196

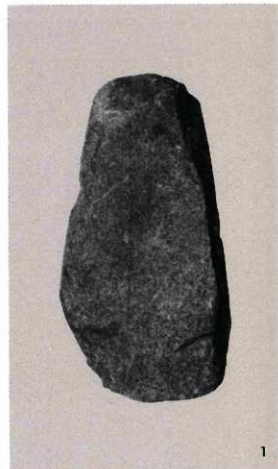
198=包含層

1=第16次調査出土

1= S Z 3 北溝



198



1

1~10=第17次調査出土

1= P 2

6= S Z 1 北溝

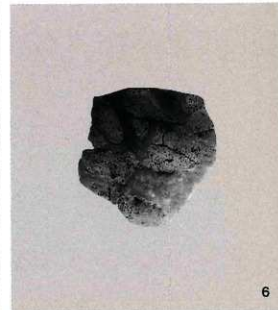
10= S D 2



1



10



6

遺物写真(6)

(土器・石製品)

※Noは図版Noと一致する

報告書抄録

フリガナ		カケノウエイセキ		ホンブンヘン		
書名		掛之上遺跡13・16・17 本文編				
副書名		袋井市駅前第二地区土地画整理事業に伴う発掘調査報告書6				
編集著者名		松井一明				
編集機関名		袋井市教育委員会				
所在地		〒437-8666 静岡県袋井市新屋一丁目1番地1 ☎0538-44-3141				
発行年月日		2003年3月26日				
フリガナ 所収遺跡名		カケノウエイセキ 掛之上遺跡				
フリガナ 所在地		シズカワケンフツクニイシタカサキ 静岡県袋井市高尾				
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	34° 44' 24"	137° 55' 53"	20000501 ～ 20020326	810.0㎡	袋井市駅前第二地区 土地画整理事業に伴う宅地造成工事
22216	151					
所収遺跡名		種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
掛之上遺跡		集落跡	弥生時代 中・後期 古墳時代 中・後期 奈良時代 鎌倉時代 近世	竪穴住居跡 方形周溝墓 土坑 竪穴住居跡 掘立柱建物 大型掘立柱建物 掘立柱建物 中世墓 区画溝 井戸 大型土坑 屋敷地削溝	土器・石器 土器（土師器・須 恵器）・鉄器 須恵器 山茶碗・小刀・鉄 製品 陶磁器・かわらけ	弥生時代中期 大方形周溝墓 群・後期 有力集落 （豪族居館） 郡衙推定遺 跡Ⅱ双倉 屋敷地 中世墓

袋井市駅前第二地区土地画整理事業に伴う発掘調査報告書6

掛之上遺跡13・16・17

— 本文編 —

発行年月日 2003年3月26日

編集・発行 袋井市教育委員会

袋井市役所建設経済部画整理課

〒437-8666 静岡県袋井市新屋1-1-1

印刷 松本印刷株式会社

〒437-0022 静岡県袋井市方丈3丁目3-11